失いし者たち

ぶらちぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失いし者たち

【Ｎコード】

Ｎ４１８３Ｙ

【作者名】

ぶらちぃ

【あらすじ】

何かを得る為に何かを失う──そんな存在ロスター。
彼らは何の為にその力を得るのか。
そして、それを得る為に失うものとは──

本格的現代物ファンタジー。

モバゲでも掲載しています。そちらもよろしくお願いします。
別の物語もありますので──

プロローグ

「やっと着いたわね」
彼女の立っている場所は、人里離れた周囲が山に囲まれているだけの大きな建物の屋上だった。
薄く吹いた風が女の髪を撫で、隠れていた顔が露わになる。
現れた色は蒼。
微かな光源によって浮かび出されたその色は、彼女の綺麗な顔を彩るパーツの一つであった。
その二つの蒼を、彼女はヘリの方へと向ける。
彼女を送ってきたばかりのヘリは轟音を上げて飛び立ち、彼女を一人残してアメリカへと戻っていった。
「……」
彼女の周囲には人の気配もなく、時の流れさえ遅れてしまうのではないかという静けさ。
だが、その静寂を破るような物が彼女に迫ってきていたのだ……。
「……っ！」
彼女はそれに気がつくとその場から後ろへと跳躍し、音も立てずに着地した。
膝をつく形で自分の居た場所に目を向ける。
先程まで彼女が居た場所の地面には、数本のナイフが刺さっていた。
そして、彼女が誰の仕業かと考える間もなく、それは襲い掛かってきた。
誰もいなかったはずの場所に突如現れた小さな影。
その影が、彼女に向けて下から拳を繰り出した。
驚異的な速度で近づいてきたその影は、常人ならば知覚できる速

さではない。
そう常人ならば……。

雲で隠れていた月が顔を出す。
月光に照らされ、小さな影の正体が露わとなった。
見た目は中学生くらいの少女の姿。
だが、その少女の顔を見ても彼女の動きに澱みはない。
女は顔面を目掛けて放たれた拳をいとも簡単に避けると、通り過ぎた少女に背後から両手を組んで、叩き付ける様に振るう。
すると、少女が一瞬で振り向き、頭上に腕を交差し受け止めた。
肉と肉がぶつかり合う大きな音が周囲に響く。
その威力が如何ほどのものかを、象徴するかのように少女の足元のコンクリートはヒビが入り、砕けていた。
だが、少女は躊躇する事なくその手を掴み取ると投げ飛ばした。
その小さな体のどこにそんな力があるのかと疑いたくなるが、現実に目の前にあるのだから信じざるを得ない。
女は空中で半回転し、体勢を立て直して着地するとすぐさま少女へ向けて飛び掛った。
正面から突っ込んでくる女を、少女は迎え撃つために自らも武器にして突進していく。
大きさの違う影がぶつかる瞬間――
少女は拳を避けるとそのまま女の腕に飛びついていた。
女は呟きながら、腕を抱えるようにしてぶら下がる少女をもう片方の手で叩き落とそうとする。
「やるわね」
しかし、少女は彼女の腕を抱え込んだまま下方に向けて体を落とした。
その急な力の移動でバランスを崩した女は手をつくと、
「甘いわよ」
片手だけを使い逆立ちの要領で体を支えると、その格好のまま腕

にしがみ付いていた少女に膝を繰り出す。
　少女は口に笑みを宿すと、一瞬で弾けるように腕を放して地面を蹴った。
「そう簡単にはいきませんよー」
　女は避けられる事を分かっていたのか、表情を一切変えずに体勢を立て直そうと足を地面につける。
　だが、あの一瞬の間に五メートルは離れていた少女はそうはさせないとばかりに、どこからか取りだしたナイフを彼女目掛けて放った。
　微かな光に反射した銀光が煌めき、彼女に迫る。
　それでも女は自分の急所に迫るそのナイフを、なんでもない事のように簡単に指で挟んで止めた。
　それによって少女の笑みは更に濃くなる。
　女がナイフを地面に捨てると金属が跳ねる音が周囲に響き、それを合図にしたかのように少女が再び地面を大きく蹴った。
　この間、およそ数十秒程の出来事。
　地を這うようにして迫る少女を視界に認めると、女も迎え撃つ為に構えなおした。
　そして、二人が交錯する瞬間――
　少女の攻撃を跳躍して避け、そのまま背後に回って蹴りを叩き込む。
　攻撃を仕掛けていた小さな影は、避けられた反動で隙だらけ。
　これは避けようがない攻撃だった。
　それほどに致命的な隙。
　しかし、間違いなく少女の首筋に収まるはずだった彼女の足が、なぜか空を切っていた。
　少女はある『力』を使い避けていたのだ……。
　そのあまりにも異常な光景は、誰が見ても裸足で逃げ出すほどに逸脱している。
　なぜなら地面から少女の顔だけが覗いていたのだ。

「……さすがね」
そんな光景を見ても表情を変えることなく彼女はそう呟くと、ゆっくりと体から力を抜いた。
首だけで振り返りニコリを笑うと、少女は地面から飛び出す。
体の調子を確かめるかのように腕を振り、少女は彼女の顔を見た。
「久しぶりですねー。元気ですかー？」
少女は、先程までの行動が嘘のように友好的に話しかけると近づいていった。
「随分な挨拶だったわね。ああいうのはやめて欲しいわ」
女はそう言うと、服の乱れを直しながら歩き始めていた。
「えへへー」
笑いながら、少女も後に続く。
屋上を出る為のドアはすでに目の前。
辿り着く頃には、少女の表情からは笑みが消えていた。
「……いよいよですねー」
少女が俯きながら呟く。
「……えぇ、そうね」
その様子を肌で感じながら女は答えていた。

そして……。

ゆっくりと……。

屋上のドアが閉じた……。

一章　日常からの乖離

◇◆◇

桜も散り、すでに梅雨の時期に入っている六月のことだった。
学校を終えた翔(しょう)は高校に入ってから仲の良くなった悪友、佐藤大地(さとうだいち)と別れてから、駅前の繁華街を歩いていた。
平凡な日常。
それを多くの人間は退屈と呼び、それでも抜け出せない日々を生き続ける。
別に悪いことではない。
ただ、翔はそんな暮らしになんとなく不満を持っていた。
つまらない日常を壊してくれる何か、そんなものを心の中で求めていたのかもしれない。
そして、それが現実となった時に物語は動きだす。

「あーあ、一人じゃ何にもやる事ないな……」
特に目新しい物も見当たらない繁華街の中で一人零した翔は、駅前のベンチに腰かけた。
頬杖をついて何気なく辺りの様子を見てみれば、仕事帰りのサラリーマン、楽しそうに腕を組むカップル、社会復帰を諦めきったような薄汚れた男などが歩いていた。
「帰ろうかな」
深く溜息をつき、呟く。
家に帰ればいつも通りの生活が待っている。
もしかしたら、という期待を込めて駅前に来てはいるものの、そんな事くらいで変わる日常などあるはずもない。

そう――それは翔もそう思っていた。

立ち上がろうとした翔が、横に置いてある学校の鞄を取ろうと手を伸ばした時の事だった。

「なっ……」

急な頭痛が襲った。

鞄を取ろうとする不自然な格好のまま、脂汗を浮かべ悶える。

『……ちゃん』

本格的な激痛に幻聴まで聞こえる気がしていた。

駅前という場所柄もあり、その様子に気が付いている人間も多数いるはずだが、誰も近づこうとはしない。

触らぬ神にたたりなし、とはよく言ったもので、それが風習となっている事に一抹の寂しさを感じ得ないが、現代の社会の中ではこれもありふれている事だ。

しかし、誰もが見て見ぬふりをする中、一人の少女が彼に近づいて行った。

年の頃は十六、七といった所だろうか。

肌理（きめ）の細かそうな栗色の長髪は陽光に照らされて燦然と輝き、透き通るような手足は触れるだけで壊れてしまいそうな程に細い。

小柄な顔は誰もが振りかえるほどに整っており、誰が見ても美少女と冠するのは間違いなかった。

若干、冷たそうな印象を抱いてしまう蒼い瞳も、なぜか妙な魅力を放つ。

その彼女が翔の蹲るベンチの前に立った。

そして――

「……あれ？」

彼女が手を翳すと、翔は小さく疑問を口にしながらゆっくりと起き上った。

あれほど苛んでいた痛みも影を潜め、夢だったのではないかと勘違いしてしまいそうな程に何も感じない。

そして、翔は目の前に誰かが居るのに気がつくと、
「君は？」
逆光のせいで目を細めて彼女に問う。
「……」
だが彼女は無言のまますぐに翻し、その場を離れようと歩み始めた。
「ちょ、ちょっと待――」
慌てて声をかけようと立ち上がるが、彼女はすぐに人混みに紛れて見えなくなってしまう。
逆光のせいで、顔も確認することもできなかった。
分かったのは一瞬見えた瞳の中にある澄んだ蒼に、そして後ろ姿だけ。
「なんだったんだ……？それにまたあの痛みは……」
いくら考えても答えは出ず、諦めるように溜息を吐くと、
「帰るか」
そう呟き、彼女の消えた雑踏の中に足を踏み入れた。
翔の事を遠くから見つめている事に気がつかないまま……。

◇◆◇

「今考えれば、あれもそうだったって事か……」
思えばあれも彼女だったのか、と翔は今更ながらに考えていた。
それに気がつけたのは、自分を射抜く視線の蒼に見覚えがあったからだった。
なぜもっと早くに気がつかなかったのかと、自分の鈍感さに軽い嫌悪さえ覚えてしまう。
彼女は翔と目が合うと問いかけた。
「大丈夫かしら？」
翔は頷きながら、隣で自分を守るようにして立つ彼女を見ていた。
現在置かれている状況は、今までの日常とはかけ離れている。

いや、何が起きているかも理解できはしない。
「なぁ、どういう状況なんだよこれ……」
翔は自分が路地裏でこのように囲まれている理由を知っているであろう彼女に向けて訊く。
彼女は一瞥をくれると、
「説明は後よ。さっきも言ったでしょう」
「それはそうだけど……」
納得はしていなかったが、反論の余地も見せない彼女に向かってこれ以上何を言っても無駄だと感じ、翔は身を呈して男たちの攻撃を捌く彼女の邪魔をしないようにする。
路地裏の濁った空気が鼻につき、妙な息苦しさを感じる。
男たちは一様に同じ格好をしていて、只のチンピラには見えなかった。
「うわっ」
不意に、翔が驚きの声を上げる。
先頭に立つ男の一人が一気に迫り、金属のパイプを翔に目掛けて振りおろしたのだ。
翔が、もう駄目かと思った矢先に、
「舐めないで」
彼女は自分の目の前にいる男を蹴り飛ばすと、すぐに翔に向けて金属パイプを振りおろす男の腕を掴んだ。
そのまま力任せに投げ飛ばすと、置かれていたゴミ箱などを粉砕しながら壁に衝突し、沈黙する。
その様子をまざまざと見せられ、男たちは先程の勢いを失い、踏鞴（たたら）を踏んだ。
中心人物と思しき男は歯噛みをしながら周りに目を向けると、
「ダメだ。撤退しろ！」
残っていた数人の男たちも劣勢である事を感じたのか、その指示を受けると、一斉に散っていった。
そして、その場に残されたのは翔と彼女のみ。

一瞬にして静寂の訪れたその場で、やっとの事で翔は口を開いた。
「助かった……のか？」
「そういう事ね」
ゆっくりと息を吐き、彼女はそれに答えると制服の裾をはたく。
そのまま翔と視線を合わせ、表情を変えずに淡々と告げた。
「だから言ったでしょう？　あなたは狙われているって」
翔はその言葉にうんざりしながら、あの時の言葉が現実になった事を思い知らされていた。
そう、あれは昨日の学校での事――

◇　◆　◇

その日。
翔は自分が通う高校への道を辿っていた。
すでに二ヶ月も通いつめている高校には大分慣れ、友達も何人か仲のいい奴ができ始めて学校に行くのは楽しいと感じている。
翔が通っているのは、地元でも普通というイメージしかわかないような中堅高校だ。
創立二十年程の比較的新しく、校則も緩いため人気は高い。
全校生徒は約千二百人、建物がグラウンドを囲う形で建てられている。
特に行きたい高校もなかったから選んだ高校だった。
何も入っていない鞄を気だるくなった右手から左手に持ち替え、何気なく歩いているうちに周囲に学校の生徒が目立ち始めた。
そんなに時間が経ったように感じなかったが気づけば、いつの間にか学校の近くまで来ていたようだ。
「おいーす」
周りの雑音に紛れて聞こえてきた声は三連ピアスに制服も着乱れたれた、だらしない格好で現れたクラスメイトの佐藤大地のものだった。

大地は昨晩降った雨でできた水溜りを気にもせず駆け寄ってくる。
幸い今日は曇りで雨は降ってはいない。
「よう」
片手を挙げて返事をしながらも歩く足は止めない。
大地は追いついて横に並ぶと、親しげに肩に手を置き訊ねた。
「翔、聞いたか？」
「ん、何を？」
ニヤニヤしながら見てくるが、翔には何のことかわからなかった。
「いや、実はな、俺のつかんだ情報で今日は転校生が来るって話を耳にしたんでね」
例を挙げるなら親の仕事の都合などがあるが、それも勝手な推察に過ぎず、無駄な労力だと考えて翔は続ける。
「こんな時期に？随分おかしくないか？まだ六月だぜ」
「だったら最初からうちの学校に入ってればいいのにな」
「まぁそうだよな」
そうする理由があるというだけの話なのだろう。
翔は横で笑みを深める大地に軽く視線を向けると、
「お前がそういう態度ってことは女か？」
訊ねるとイヤらしげに口を歪ませ、親指を立てた。
「昨日見たって奴がいてな、かわいかったらしい。しかも帰国子女なんだと」
誇らしげに言い放ち、随分と楽しそうにしている。
「帰国子女の加点要素があるのかは謎だけどな」
「なんか言ったか？」
「いや、まぁどうでもいいさ」
とそんなに興味のない様子で翔は歩き続けている。
そのそっけない態度に不満げな顔でまだ何か言いたそうだったが、それについては見なかった事にしていた。
すでに学校の門は目の前。
「時間がやばいな、少し急ごうぜ」

腕の時計ではすでに八時二十六分、三十分からホームルームが始まるので間に合わないかもしれない。
「そんなに気にすることないだろー。ゆっくりいこうぜ」
と言って大地についてくる気配はない。
「先行ってるからな」
翔が駆け出した瞬間『待ってくれよー』と聞こえたが、それを空耳だろうとあっさりと切り捨てた。
大地を置いてきぼりにしたまま校舎の中に入り、なんで一年は四階なんだよ、と毒づきながらも階段を駆け上がる。
「ぎり、かな」
と呟きながら教室の扉を開けた。
教室の中には生徒たちが思い思いの場所でくつろいでおり、自分の机に座って話している人や、朝食を本に目を通しながら食べている人もいる。
端の方では三人の女の子が集まって談笑していたのが見えた。
三人が楽しそうに話しながら翔が入ってきた方を向くと、その中の一人が手を振って声をかける。
「あ、おはよー。遅かったね、もう少しで遅刻だよ？」
「昨日はあんまり寝れなくってな」
屈託ない笑顔を浮かべて話しかけた女の子は、小、中学の同級生の緒方茜(おがたあかね)だった。
小学校の頃から明るくて、人見知りしない子だったので誰でもすぐに仲良くなっていたのだが、顔も良くもてる部類にあった茜は中学の始め辺りで一部の女子からは疎まれてもいた。
現在は元々の性格の良さからそのような虐めなどはなく、むしろ人気者と言ってもいいくらいである。
「あ、先生来たよ」
チャイムが鳴ると同時に担任が入ってきて、いつものように教卓に日誌を置きながら話し出した。

「あー、みんな知ってると思うが今日は転校生が来る。いつものようにあんまり騒がないようにな」
「俺なんか今日知ったぞ」
溜息をつきながら鞄を机の横に掛ける。
「いつも先生の話なんか聞いてないじゃない」
「大地の言ってた情報ってこれかよ。みんな知ってたんじゃねぇか」
「かもね」
鞄を掛けた後、頬杖をつきながら面倒そうに言う翔に茜は微笑みを浮かべる。
「女の子なんだってねー、仲良くなれたらいいな」
「んー、茜は誰でも仲良くなれるんじゃないか？」
特に何も考えずに返答するが、その言葉を聞いた茜は嬉しそうに笑みを濃くする。
それを見て翔も薄く笑みを浮かべた。
――周りまでも幸福な気分にさせるような笑顔が茜の魅力なんだよな。
と、翔が考えていると、彼女が何か言ってきている事に気づく。
「ねぇ聞いてる？」
「あ、あぁ、わりぃ。考え事してた」
「もう来るみたいだよ」
茜の示すように、教室は妙な静寂に包まれていた。
「ん、では来たようなので挨拶してもらおうか」
担任もそれに気がついたのか、扉の人影に言葉を向ける。
そして、教室の扉が勢いよく開いた。

「遅れましたー。すいませーん」
ところが、そこに来た人物を見てみな声を失った。
現れたのは転校生ではなく大地であり、だらしなく立つその姿はまさに現代の高校生を顕著に示している。
緊張の面持ちでいた教室内の生徒たちは落胆し、呆れ顔。

気持ちの空振りの効果は思いのほか大きいようだった。
「あ、あれれ？　みんなどうかしたの？」
少々馬鹿っぽいこんな所もみんなから結構好かれているのかもしれない。
現状では望まれていないが。
大地はみんなの視線を受け、微妙な気まずさに包まれたまま、おずおずと教室内に入ってくる。
「相変わらずだね」
と言う茜もちょっと楽しそうにしている。
担任にいいから座れと言われ、前に座った大地の背中を見ながら、翔はつまらない感傷だなと結論付けた。

「ん？」
翔がそんな風にぼーっとしていると、いつの間にかクラスの雰囲気が変わっていることに気づき、ざわざわとする級友たちを一瞥すると前を向く。
すると転校生がすでに来ていた。
「おい、あれはSSクラスだぞ……」
「は？　何がだよ」
翔が脈絡のない事を言う大地に問うと、
「おま、あの子を見て何も感じないのか？」
「あいにく俺は目がそんなに良くないからな。こんなに後ろの席じゃはっきりは見えねぇって」
翔は興奮する大地に呆れつつ、周囲の反応を見るが、はっきり言ってみな固まっている。
右隣にいる茜まで呆けている始末だった。
「すごい、可愛い」
頬に手を当てながら足をバタバタさせている。
ローファーが床に当たり規則正しく音を立て、翔の周りを級友のざわめき。ローファーの鳴らす音。大地のバカ会話が包む。

茜までもがそんな事を言うからには、それほどのものなのだろうか？　と思い、翔は再び教卓の方へと視線を向けた。
挨拶するように担任は指示を出しているようだが、一向に話そうとはしない転校生を見ると、自ら紹介を始める。
「えー。この子は月島紫苑君だ。家族の方がまだアメリカの方に残らねばならない為、先に来ているらしい。色々困った時はみんな手助けしてあげてくれ」
「一人暮らしか」
珍しく大地は真剣な顔で言うのだが、考えていることはくだらない。

「席はそうだな。あそこの一番後ろの席がいいか」
担任がそう言うと、自分の席の方へと向かっていく。
翔のいる席の方へ。
周りではざわざわとしているが、本人はまるで気にする事もない様子で歩いている。
「……！」
確かに可愛い。
肩よりも下にある髪が綺麗な軌跡を描き、腰へと流れていた。
触れるだけで零れそうなその髪は、歩くたびにサラサラと流れ、一本一本が可視できるほどに艶やか。
だが、何故か分からないが奇妙な既視感がある。
「なんだ……？」
変な違和感があったがそれが何かまでは分からない。
自分では理解しているのに、いざ言葉にして他人に伝えるのが難しいもどかしさと似たような感覚が支配していた。
転校生が翔の横に来た瞬間——視線が交錯する。
彼女の目は色素が薄いのか若干蒼い。
その青は空の色とかではなく深い海の底のような色に感じる。
なんとなく憂いを持つ、寂しげな色。

彼女は足を止めて翔を見ていて、図らずとも二人は見つめ合うようにも見える。
しばらく時が止まったように二人はそのままだった。

「あっ……」
翔はそう零すと、周囲の視線に気づき、ばつが悪そうに前を向いた。
ずっと見ていたら、周りからそれだけで咎人にされてしまいそうな勢いだった。
大地までもが責めるような視線を向ける。
「なんだ？」
「べっつにぃ」
不毛な会話をする翔は、横の茜の視線には気づかない。
そんな中。
紫苑は何事もなかったかのように机に鞄を置き、自らの席に座り鞄の中身を取り出す。
その仕草を見てもなにか気にかかる。
普通ではあるのだが、敢えて言うなら動きが機械的とでも言えばいいのだろうか。
ホームルームに終わりを告げるチャイムが鳴り、まだざわついた雰囲気のまま担任が出て行く。
彼女の横顔を見れば、周りの様子にも気づかないかのような無関心。
その様は人間が道端にいる蟻に気づかないのと同じ。
いや、いるのに気づいても気にも留めないのと変わらない表情だ。
これさえもあっているか分からない。
翔も見ただけで分かるほど達観しているわけでもなく、曖昧なまま結果は時間とともに過ぎていった。

それから程なくして、彼女の周りには人垣ができようとしていた。
この現状は当然ともいえた。
こんな可愛い転校生相手に、話しかけようとする者がいないはずもなく、何人も生徒が話しかけようと機会を伺っていた。
だが、それも結局は誰にも叶う事はない。
彼女が放つオーラのようなものに躊躇し、誰も話しかける事などできはしなかったのだ。
むしろ話をするどころか、まだ誰も声さえ聞いていないのだが。
そして最初の授業が始まった時の事。
翔は体育の授業中に紫苑を見ていたら気になる事があった。
その日は、女子は持久走が課題で千五百メートル走らされていた。
コースは一周が三百メートルのグラウンドを五周。
特に代わり映えのしない景色の中で走り続けなければならない。
紫苑は特にタイムがすごかったわけでもなく、目立ってはいなかった。
だが、なんで必要以上に気になったのかといえば、他の生徒は疲れてクタクタな様子で、地面に座り込む女生徒までいる始末。
その中でも、紫苑はなぜか汗一つかかず平静を保っていた。
走る前となにも変わらずに。
これほど異彩を放っているのだが、本人がどう感じているのかも理解できない。
何より本気で走っている様子もなく、翔にはあのタイムも当てにならないような気がしていた。

「すごいな」
「ん、そうだな」
校庭の傍らの縁石に座り込み、スニーカーが土を食む感触を味わいながら淡々と言う翔だが、大地の言葉に内心深く同意していた。
「なんて綺麗な足なんだ……」
「……」

続く言葉には言葉を失うしかなかった。

翔は自分と同じ感想を抱いたのか、と感心した事に後悔し、嘆息する。

大地の思考はどうしてもそちらの方に向いてしまうようだ。

「で？　お前らは授業中に何をしてるんだ？」

と、不意に後ろから声をかけられた二人は同時に振り向く。

「隆太郎か」

言っている事とは裏腹に、責めるでもなく笑んでいるのはクラス委員長の如月隆太郎（きさらぎりゅうたろう）だった。

隆太郎はこの高校に剣道のスポーツ特待生で入ってきた男で、勉強もできるまさに文武両道が服を着ているような人物。

だからといってお堅いわけでもなく、翔にとってはクラスの中でも大地と並んで話しやすい奴のうちの一人。

「相変わらずだな。お前らも体育は嫌いじゃないはずだろ？またサボりか」

「またってなんだよ。毎回さぼってるわけじゃないし」

「体育は好きなんだけどな。あいつが苦手なんだよ」

特に気にした様もなく答える大地に続いて翔も答える。

「姫ちゃんか」

翔が指し示す先にいるのは、体育教師の新島千秋（にいじまちあき）。

身長が百四十センチメートル台の小柄な体格で、顔も童顔。中学生と言ってもわからないのではないかと思われるほどにあどけない姿から、生徒からは姫ちゃんと呼ばれている。

体育教師が一番に遠い仕事に思えるが、本人曰く『これぞ天職です！』らしい。

「何かと指示してくるんだけど、なんか妹とおままごとしているような感覚になってくるんだよな」

言う翔に向かって、あれ？という表情の隆太郎が続く。

「翔って、妹いたんだっけ？」
「いや、いな――」
いない、と言おうとした翔が不意に言葉を途切れさせ、動きを止める。
怪訝に思った二人が、何か声をかけようとした時に翔は頭を抱え黙り込んだ。
「お、おい大丈夫か」
「すごい汗だぞ」
慌てた様子で話しかける大地と隆太郎をよそに、翔は自らの体の中にある空洞に、何か得体の知れないものが、無遠慮に手を突っ込んでくるような不快感に体を苛まれていた。
胸に楔が打ち込まれたような錯覚。
耐えがたい苦痛は永遠にも続くかと思われたが、それも長くは続かない。

苦痛がすぐに去った事で、何事もなかったかの様に振る舞おうとしている翔はゆっくりと息を吐くと、
「なんでもない。それより委員長のくせにこんなところでサボってていいのか？」
「いや、それよりも本当に大丈夫なのか？」
翔の言葉を受け流して質問を返す。
「気のせいだって。とにかく戻ったほうがいいんじゃないか？」
それでも翔は平静を装い、隆太郎に視線を向ける。
一瞬は不服そうな顔を浮かべるが、隆太郎は『確かに』と言うと、その場を後にした。
翔はその後ろ姿を見つめながら、さっきの事を考えていた。
今までにこのような事がなかったわけではない。
今回のも一週間前の駅前での時と同様に、耐えがたい程に激しい衝動が押し寄せてきて、自分でもどうしようもなかった。
「ほんとに平気か？」

そんな翔を心配してか、大地も不安げな表情を浮かべる。
そこにはふざけている雰囲気などは一切ない。
「ああ、それよりそろそろ終わりだろ」
翔はそんな大地に気取られないよういつもの通りに話し、この話は終わりだとばかりに立ち上がった。
　さっさと行ってしまう翔を見て、大地も仕方なしに後へと続く。
まさかその姿を見ていた者が二人いることなど翔たちが気づくはずもなく、この日は放課後を迎える事となった。

授業に終わりを告げるチャイムが鳴り、生徒たちは散り散りになっていく。
　翔も同じように帰ろうかと準備していた。
　ところが、
「翔」
ふいに隣から声をかけられ、そちらを向くとノートを持った茜が覗き込むように立っていた。
「どうした？」
「えっとね。今からあの月島さんにこの学校案内してあげようと思うんだけど、一緒にいかない？」
すでに準備を終えた茜と、仲良しである他の二人が翔の返事を待っている。
翔はそれに対してあまりいい顔はしない。
正直言って、翔としてはなるべく面倒なことはやりたくなく、まして茜と仲がいいとはいえ特に話もほとんどしていない二人がいるからだった。
翔は自分の記憶を辿り、二人に目をやる。
ポニーテールをしている大人しい雰囲気の方が渡瀬香苗（わたせかなえ）で、ショートカットのギャルっぽい方が影塚里佳（かげづかりか）だったはずだと思い出した。
この二人とも一緒というのも少々気まずいと感じ、断ろうと口を開

こうとしたところで思わぬところから横槍が入った。
「話は聞いたぜぇ！俺も行く」
どこから現れたのか、いきなり参加した大地が告げる。
「いいんじゃなーい？」
「おっし、決まりな！じゃあ行こうぜ」
「ちょっと、あんたが仕切らないでよねー」
楽しそうに言う影塚と大地をよそに、翔はもう断れる雰囲気ではない事に内心落胆していた。
こうなっては自分だけが抜ける事は出来ない事を、肌で感じてしまったが為に。

結局、同行することになった翔を含め、五人で紫苑の元へと向かう。
紫苑は帰る支度を終えたのかちょうど席を立つところで、そこに現れた翔を見ても気にも留めずに、鞄を持って去ろうとしていた。
何かしらの反応がもらえると思っていた翔はその行動に焦り、思わず腕を掴んでしまう。
「何か？」
咄嗟の事とはいえ強引に止めるような形になっていた。
気まずい雰囲気が流れるのを感じたのか、茜が口を開く。
「あのね。月島さん来たばっかで学校の事が全然わかんないと思って。よかったら、私たちに案内させて貰えないかなって思ったんだ」
「そうそう、せっかく同じクラスになったんだし、仲良くしよーぜ」
お節介にならない程度に引いた物腰で言う茜に、大地が続く。
「興味ないわ」
しれっと言い、立ち去ろうとする。
しかし、翔に腕を掴まれていたのを思い出したのか、放すように視線を向けた。
「あ、ああ。すまん」
そう言って翔は腕を放した。

すでに紫苑は興味を失っているのか、教室を出る為の扉に手をかけている。
その時——またあの痛みが翔を襲ったのだ。
「ぐっ」
誰にも悟られないように表情を消し、堪えていた。
幸い、茜達は断られて残念というのを話していたが為に、翔の様子を気にしているものはない。
翔も痛みがすぐになくなったので、誰にも気づかれていないだろうと安心していた。
だが、予想もしていない方向から声がかかる。
「やっぱり、お願いするわ」
紫苑は言いながら、五人の所へ近づいていった。
どんな心変わりかは知らないが、茜達にとってそんなことはどうでもいいらしく、やったねと無邪気に四人は喜んでいた。
翔はそんな茜たちの様子を見て、まぁいいか、と考える。
そのまま顔を紫苑の方へ移すと、視線が交錯する。
一瞬目が合ったが、なぜかすぐに逸らされてしまった。
「なんなんだ？」
翔が呟く頃にはすでに皆は動き始めていて、疑問に首を傾げながらも小走りに後を追いかけた。

それから案内する為に六人が並んで歩いていると、すでに話題にあがっているらしい美少女転校生の噂のせいか、そこかしこから無遠慮な視線が向けられる。
「やっぱ目立つんだねぇ」
「この顔だからね」
周りの様子を見ながら言う茜に、軽い調子で渡瀬が答える。
「でもさ、なんでこの学校に？」
ぽん、と思いついたかの様に前を歩いていた影塚はつま先だけで半回転。ターンの要領で紫苑の方に向きなおり、問いかけた。

「この場所は、私にとって都合のいい事が多かったから」
「んー。家から近い感じか！」
なるほどなるほど、と一人で納得して、『あ、だったら』と続けようとするところに、見かねた茜が、
「ちょっとちょっと。月島さんも困ってるって」
「そんな事ないよねー？　私達ラブラブだし！」
紫苑の顔を覗き込むようにして同意を求める。
会ったばかりの相手に対して、それだけの態度で接する事ができるのも珍しい奴だが、
「はしゃぎ過ぎだ、影塚」
「そこかよ」
まるでコントのような対応に、渡瀬や大地たちも乗る。
翔の言葉に反応し、ムッとした表情になった影塚が詰め寄る。
「私のことは里佳って呼ばなきゃダメだよ！」
「じゃあ、私の事は香苗って呼んでね」
「俺はジェームスでいいぜ」
「わかったわかった。里佳に香苗それとポチな、案内するんだろ？早く行こうぜ」
先に進もうとする翔に置いて行かれないように茜と紫苑が続く。
「ちょ、ちょっと待ってよー。置いてかれちゃう。早くいこ香苗！それとポチ！」
「うん。いこポチ」
香苗と里佳も早足で追いかける。
その後にポツンと佇むのはポチだけだった。
「……ひどくね？」
誰にともなく呟く大地を待とうというものは、当然の如く存在しなかった。

そんなこんなで購買部、食堂、体育館、音楽室、美術室など授業や日常的に使う場所を案内した後、六人は最後に屋上へと向かった。

「この学校の屋上は珍しいんだよ？」
そういう茜の言う通り、ここの学校の屋上は少し変わっている。
ここの理事長の趣味なのか、屋上なのに生徒の出入り自由。
何より、ガーデニングガーデンの様に花壇が設置され、生徒たちの意外な憩いの場として機能を果していた。
「ここの花、結構綺麗なの多いもんね？」
赤白と咲き誇る花に触れながら話す茜に、里佳と香苗も座り込み談笑して、特に興味もなさそうなポチ……、もとい大地は欠伸を噛み殺し、近くにあるベンチへと向かっていった。
妙な違和感があった。
そう、案内するといってここに連れて来たはずなのに、茜も里佳も香苗も大地でさえ紫苑に話しかけようともしないのだ。
翔が不思議に思いみんなを見ていると、横から声を掛けられた。
「あなたは触れた事があるのね」
「何を言って……」
翔は驚きを顔に乗せて体を向ける。
妙な寒気が肌に纏わりつくような気がしていた。
それが只の錯覚であって欲しいと思ったのは、紫苑の目が何かを伝えようとしているのが分かってしまったからだった。
だが、それが何かまでは分からない。
「忘れては駄目。あなたはすでに人ではないのだから」
意味のわからない事を言う紫苑に動揺し、反論しようと口を開こうとするが、
「……！」
目が合った瞬間――世界が変わった。
「忘れないで。あなたは狙われている」
紫苑の言葉が翔の止まっていた時間を、ついに動かしてしまった……。

◇　◆　◇

「説明してくれるんだろ？」
自分たちの周囲に転がる男たちを見まわしながら、翔は紫苑に問いかけていた。
こんな事に巻き込まれるとは夢にも思っていなかった翔にとっては、この現在の状況は筆舌に尽くしがたいものがあった。
それも当然の事で、あなたは狙われていると急に言われても、はいそうですかと簡単に割り切れるものでもない。
屋上での出来事の後。
まるで存在さえ気がつかないかのような態度だった大地たちの反応も戻り、案内する場所もなくなった翔たちは各々帰宅する運びになった。
方向が同じだったのか、紫苑と翔が二人きりで帰っていた矢先での出来事。
その結果がこれでは、一緒に帰った事にも何かしらの作為があったのかと感じてしまう。
それは紫苑も理解しているようで、
「分かってるわ。ちゃんと説明はするつもりだから安心なさい」
言いながらポケットから何かを取り出す。
それは現代社会での必需品とも言える無機質な部品で作られた通信機器。
簡単に言えば携帯電話だった。
偶然なのだろうが、手に持つその携帯電話は彼女の瞳の色と同じ青を基調としている。
そしてどこかに連絡を取ると、静かにそれを閉じた。
「学校に戻るわよ」
「……はっ？」
紫苑の言葉に思わずといった感じで出た感想だった。

説明を聞けると思っていただけに、その言葉は予想外だったのだ。
「聞こえなかったのかしら？　学校に戻ると言ったのよ」
「聞こえてるけど、どういう事だよ」
その答えを聞くと、無表情のまま紫苑は翔を見続ける。
「な、なんだよ」
妙な居心地の悪さからか、翔は目線を逸らして呟いた。
「あなたは神経が太いのか、それともただ単に馬鹿なのかどちらなのかしらね」
「なっ……！　いきなりなんだよ！」
余りの暴言に驚きを隠せない翔は声を荒げる。
だが、
「だってそうでしょ？自分が襲われたというのに、あなたはまだここに居るつもりなの？」
「……」
ごく当たり前の意見に何も言い返せなくなってしまう。
反論できない事を見越してか、紫苑はそのまま歩きだした。
結局、説明を聞く以外に方法のない翔はどこか憮然としたまま、その後についていくしかなかった。

「なぁ。あいつらはそのままで大丈夫だったのか？」
学校が視界の端に見え始める頃に、翔は口を開いた。
隣を歩く紫苑はちらりと翔を確認すると、
「問題ないわよ。後の処理は滞りなく終わっているはず。あなたはそんな事を心配する必要ないわ」
「処理って、まさか……」
その言葉にビクリとして、翔の足が止まる。
「安心しなさい。あなたの想像しているような意味ではないから」
翔はあからさまにホッとした表情を浮かべると、前で待つ紫苑の隣まで駆け寄る。

歩みを再開すれば、もう校舎は目の前にあった。
下校時刻もとうに過ぎている学び舎は、普段の様な人の匂いを感じさせない。
どこか寂しげな雰囲気すら醸し出している。
それからしばらくすると、校舎の中に入っていった二人はある部屋の前に立っていた。
「なぁ。ここって……」
紫苑は翔の言葉が聞こえていないのか、それとも無視をしているのか、返事もせずにその扉を開く。
そこを通りぬけると、翔はどこか落ち着きのない様子で周囲を見回していた。
こんな場所に出入りする機会がなかった翔にとっては、中の光景が物珍しく映ったようだ。

中は想像以上に豪華な作りである。
樫で作られた机は黒光りし、備え付けの数人掛けのソファは座っただけで抵抗なく体を沈めてくれるだろう。
棚には仰々しく飾られた数々の優勝カップ。
壁にはどこで手に入れたのか、立派な角を持つ鹿の頭部の剥製が掛かっていた。
そうここは学校の長の部屋。理事長室であった。
「なぁ。もうそろそろ説明してくれてもいいんじゃないのか？」
振り向いた翔は紫苑に問いかけていた。
それは紫苑が一体何者であるかについてなのか、それとも先程の事なのか、その言葉だけでは分からない。
恐らくは後者なのだろうが、もしかしたら両方なのかもしれなかった。
「そうね。あなたには聞く権利がある」
真っ直ぐに向けられた視線は射抜くが如く翔を貫いた。
翔は暑くもないのに額に浮かぶ汗を拭うと、喉を鳴らす。

聞いてしまったら何かがおかしくなってしまう。
そんな妙な予感が翔の鼓動を速くしていた。
「その前に紹介しなければならない相手がいるみたいね。……隠れてないで出てきなさぃ」
翔はその言葉に疑問符を浮かべ、眉を寄せていた。
間違いなくここには二人以外は誰もぃない。
隠れる場所があるようにも見えなかった。
何を言っているんだ？といった様子の翔が、口を開こうとしたその時の事だった。
「やっぱり分かってましたかー。紫苑ちゃんも人が悪いですねー」
翔は不意に響いた明るい声に体を強張らせる。
声は聞こえてくるが、姿はどこにもない。
「だ、誰だ！」
驚きを隠せない様子で翔が叫ぶと、
「私の事忘れちゃったんですかー？　先生とっても悲しいですー」
舌足らずな言葉と共に声の主は姿を現していた。
いや、正確に言えば少し違う。
そして、
「う、うわあああぁぁぁぁ！！」
絶叫が室内を包み、恐怖に顔を歪めた翔は尻餅をついていた。
それはごく当然の事で、翔でなくても似たような反応を示していた事は間違いない。
なぜならそこには、頭だけを床から覗かせた少女の姿があったのだ。
それを平然と見ていられる人間がいたとしたら、その人間は頭のネジがどこか抜けているか、よほどの大物なのだろう。
或いは、同種の人間――
敷き詰められた絨毯を乱しながら後ずさる翔は、すでに恐怖で言葉もでない様子。
平静を保ち続ける紫苑は冷めた目で翔を見てから、その元凶に視

線を移した。
「ふざけるのも大概にしなさい。話がややこしくなるわ」
「ごめんなさいー」
言いながら隠していた全身を床から現して、笑顔のまま舌を出す。ちっとも反省している様子はないが、紫苑は慣れているのかそれにも反応は示さない。
「あなたもいい加減こっちへ来なさい」
紫苑は隅の方で壁に張り付いている翔にも言葉をかけた。
「そうですよー翔君。こっちでお話しましょー」
笑顔を湛えてはいるが、それも翔にとっては自分を貶める呪いの言葉に感じてしまった。
相手の顔を見て相手が誰なのかは翔も分かっていた。
だからやっとの事で出た言葉はこんなものだった。
「姫ちゃん……お前一体なんなんだよ……」
「お前はないんじゃないですかー？　仮にも先生なんですよー！？」
頬を膨らませているが、あまりに幼すぎるその容姿のせいなのか怒っているようには見えない。
そう、彼女は中学生のような見かけではあるが、れっきとした真道学院の体育教師である新島千秋その人だった。
翔は困惑を浮かべたまま、ゆっくりと顔を上げ、
「説明……してくれるんだよな？」
「ええ。実は——」
紫苑はその言葉に頷くと語りだした。

◇　◆　◇

あの後。
説明を受けた翔は、ただ無感情に相槌を打つ事くらいしかできなかった。

それも当り前の反応だった。
あまりにも突拍子もないその話を信じるという方がどうかしている。
それほどにその話は常軌を逸していたのだ。
「意味が分からねぇよ……」
そう零した翔は、自宅に帰る為に一人で歩いていた。
あんな話はデタラメで、ただの性質の悪い冗談だ！　と、吐き捨てたい気持ちを抱えたまま。
ただ、それができなかった理由もあったのだ。
それが路地裏での出来事。
確かにあれを仕向けたのが紫苑たちだというのなら話は別だが、からかうにしては手が込みすぎているとも感じていた。
そこまでする意味すら理解できない。
それにあの床から顔を出していた千秋の存在。
あのような現実離れした光景を目の当たりにしてしまった以上、簡単にそれが冗談だと言えないのも偽りがたい気持ちでもあった。
「はぁ」
深い溜息を吐き、重くなった足を引きずるようにして歩を進める。
辺りはすでに夕暮れを過ぎ、夜の風が吹き始めていた。
そして、いつの間にか意識せずに立ち入っていたのは家の近くにある公園だった。
あの話の事について考えるのにはちょうどいい、と翔はゆっくりとベンチへ近づいていく。
「俺が特殊な存在……か」
翔はベンチに腰かけると呟いた。
二人の説明は実に簡単なものだったのだ。
千秋のような特殊な能力を持つ者をロスターと呼ぶ事。
翔がロスターという枠組みの中でも特別な存在である事。
そして、命を狙われているという事。
ロスターというのは人にはない特殊な力を持っているが、それを得る為には条件が二つあると紫苑は語っていた。

一つは適性があるかどうか。
これについては試さなければ分からないらしく、ロスターになった者は適性があったと判断するしかないという話。
もう一つは対価を支払わなければならないというもの。
その対価というものが何を指すのかは翔には判断がつかなかったが、楽しげなものでもないだろうと考えていた。
「結局、分かったのは俺が狙われてるって事だけじゃねーかよ。しかも、それが本当なのかもわかんねーし」
手を額に当てて目を瞑ると、柔らかな風が奏でる葉の音が耳に入る。
他の音がここに混ざれば、簡単にこの静けさは壊れてしまう事だろう。
「協力すれば助けてくれるらしいし、更に詳しい話も聞かせてくれるらしいけど……。どうすっかな」
観点は紫苑たちの事を信用するかどうか、その一点だった。
もしも彼女たちの言っている事が本当ならば、協力するのも吝か(やぶさか)でもないと考えていた。
だが、仮に命を狙っているのが紫苑たちだとしたら？と、そんな思いに至るのも当然の事。
答えのでない思考のループに迷い込んだ翔は、正面を呆然と見つめている。
しばらくそうしていると、不意に鼻の頭に雫が落ちた。
「雨か」
そのまま頭上を見ていると、霧のような細かい水滴が着ていた制服を容赦なく濡らしていく。
六月とはいえ濡れた体は肌寒く、鬱屈した気分をさらに落ち込ませるには十分だった。
「保留……だな」
熟考した上で翔はそう言うと、帰ろうとベンチから腰を上げよう

としていた。

その時――

「一人で居るとは好都合だな」

翔は急に掛けられた声に驚き、そちらの方を向く。

すると、そこには異様な格好で立つ男の姿があった。

歳の頃は三十半ば、背の高さは百八十前後。綺麗に剃りあげられた頭部に黒いサングラスをしている顔は表情を伺い知る事はできない。

黒い革でできたジャケットとパンツは体にフィットし、その体の線をこれでもかとばかりに強調していた。

服の上からでも分かる筋骨隆々の体は見るものを威圧し、圧倒的な存在感を佇ませている。

「ちょうどいい。付き合ってもらうぞ」

男はぬかるんだ地面を踏みしめ、ベンチの方へと近づいていく。

「あっ……」

知らぬ間にベンチから立ち上がっていた翔は、何を言っていいのか分からず一歩後ずさっていた。

暴力が服を着て歩いているような錯覚の中、無言のまま歩を進める男に恐怖を抱いた翔はそのまま逆の方へと走ろうとしたが、

「逃げるんじゃねぇ！」

翔は信じられない光景を目にした。

男の振った丸太のような腕が、そこに生えていた太さ八十センチはあるだろうと思われる木をへし折ったのだ。

目の前で起きた事を理解できない頭とは違い、体は素直に反応していた。

この場にいては危険だという本能が、考える前に体を突き動かしていたのだ。

男から逃げるように走りだしたのはいいが、後ろから追いかけてくる男に対する恐怖が足を動かすのを邪魔している。

「はぁ……はぁ……」
　息を切らしながらも走る事をやめる訳にはいかなかった。
　捕まればどうなるか想像できないほど、翔も馬鹿ではない。
「こいつが……。俺の命を狙ってる……奴なのか……？」
　急げ！急げ！と、心の中ではそう思うも、鈍重そうな見た目とは裏腹な男の足の速さに焦っていた。
　そして致命的なミスをしてしまう。
　横道に逸れようと急な方向転換が災いしたのか、大量に水分を含んだ地面に足を取られて転んでしまったのだ。
「ぐっ……」
　転んだ拍子に手の平などに擦り傷ができていたが、そんなのに構っている場合じゃないと翔が立ち上がろうとしたその時――
「手間をかけさせるな」
　翔が自身の体が浮くような感覚に目を見開くと、自分が胸倉を掴まれて持ち上げられているのだと気づいた。
　六十キロはある翔を片手で持ち上げる腕力に恐怖を抱き、顔が引きつってしまう。
「ぐぁ……くるし……い……」
　翔は胸倉を掴む男の手を引き剥がそうと暴れるが、全然ビクともしない。
「おとなしくしとけ」
　自由になっている足で、男の体を蹴りつけてもコンクリートの壁を蹴っているかのような感触がするばかり。
「！」
　そう言うと、男は腕を横に振って翔を投げつける。
　すごい勢いで後ろにあった木にぶつかった翔はあまりの衝撃に、四つん這いの姿勢のまま息を詰まらせて噎せ（むせ）込んだ。
「げほ……げほっ……」
　だが、それで終わりではない。
　翔が息を整える間もなく、男は五メートル程あった距離を一瞬で詰

めた。
そのままサッカーボールを蹴る要領で横から蹴り飛ばす。
瞬間――
ボキッという嫌な音が翔の右腕から聞こえ、そのまま吹き飛ばされる。
最初は何が起きたのかわからなかった頭が働き出した頃には、尋常じゃない痛みが翔を襲い、
「ぐあぁぁぁぁ！！」
あまりの痛さに絶叫する翔は地面を転がる。
男はその様子に、まるでゴミでも見るかのような瞳を向ける。
「あーあ、余計に五月蠅くなっちまったな」
そのまま男は笑みを浮かべ、翔を持ち上げた。
「あ……あ……」
言葉にならない呻きを漏らす翔に、
「さよならだ」
断罪の言葉が告げられる。
そして翔が最後に見た光景は、男が振りおろす死の香りを漂わせる拳だった……。

◇◆◇

――ここは、どこだ……？
中途半端に覚醒している頭を揺り動かし、翔は周りを見渡すがそこには何もなかった。
そう、何も。
見渡すという行為ができているのかもわからないほどの暗闇。
深淵に抱かれるという表現が似合いそうなほど何も見えない。
自分の手も、足も、体も、本当にそこにあるのかわからない希薄な存在のように感じ、翔は自分という存在にすら疑いを持った。
――自分は本当にここにいるのだろうか……。

そんな錯覚さえ抱きながら、後ろに両手をついた格好のままだった翔は立ち上がった。
「……？」
ふと、何かに気づく。
「地面は……ある……？」
そう呟き、つま先で地面を軽く叩いてみると、コンコンという無機質なプラスチックでも叩いているような音と感触が返ってきた。
「ここは、どこだ？」
口に出して言ってみても、もちろん回答はどこからもない。
周囲を改めて見回してみてもあるのは闇、闇、闇。
恐怖が体を包むのは当然の事、ここを動くのが怖いと思うのは仕方ない。
「絶対にここを動かない……」
翔はそう呟くと、一歩踏み出していた。
「動いたら何が待っているか分からないんだ。とりあえずここで誰かが助けに来るのを待ってよう」
そう言って、更に一歩を踏み出す。
そして次第にその足を迷いなく動かし始めていた。
翔は自分の起こしている行動の矛盾にもはや気づいてさえいない。
「こっちだ」
何故か進むべき方向だけは分かっている。
それが何を意味するのかはまったく理解していなかったが、それだけは確信していた。
これほどの暗闇の中。
目の前に何があっても見えない状況では、普通なら人は前に進む事を恐れる。
すぐ先に壁があるかもしれない。
一歩先は足場がないかもしれない。
何者かが自分を待ち構えているかもしれない。などと思うものだ。
だが、そんな憂いは翔の心には一切なかった。

その事にも一切の疑問も持たず、翔は何かに導かれるかのように歩を進める。

しばらく進んだ後。

先程まで何もなかったはずの遥か先に光が見えた。

「……」

無言のまま、さも当然のようにその光の下へと向かう。

ここには時間や、距離という概念自体が存在しないのかもしれない。それを証明するかの如く、遥か遠くにあるように見えたその光の玉と翔の距離は、いつの間にか目と鼻の先にあった。

翔はそこで立ち止まると、直径三十センチほどのその光の球体を包み込むかのように両手で支える。

その瞬間――周りを支配する闇に亀裂が入り、爆ぜた。

闇がまるでガラスを砕いたかのように崩れ落ちると、そこには美しい光景が翔を待っていた。

「ここは……」

先ほどまでの無意識の心は急に離れ、自分を取り戻した翔は不思議な感覚に囚われている。

「暖かい……」

ダイヤのような輝きを持つ木に囲まれた森の中、なぜか涙が流れ落ちる。

そのまま何かを抱きしめるかの様に両手で自分を抱き、目を閉じて立ち尽くす。

何かが起きなければ永遠にそうしていたかもしれない。

ところが翔はバッと顔を上げる。

「……なんだ？」

驚いたような顔を浮かべる翔は左右へと視線を向けた後、耳に手を当て、音を逃さないように集中する。

すると『ピチャ』という水の跳ねる音が聞こえた。
導かれるかのようにそちらの方を向くと、再び『ピチャ』という音が。
翔は気がつくとその音がする方へと歩き出していた。
透明な砂のような物を踏みしめながら進むと、透明な木の向こうに何かが見える。
「ほんとのガラスみたいに硬いわけじゃないんだな」
生えている葉っぱを一つ摘み、握ってみると簡単に砕けてしまった。
手からは破片が零れ、キラキラと光に反射している。
見た目は水晶でできているような木を掻き分けると、そこには今まで以上に美しい光景が翔を待ち構えていた。
小さな湖のような水面はゆらゆらと揺れ、そこから空気中に浮き出すように大小の淡い光の珠が空へと向かってゆっくりと舞い上がっている。
そこは表すならば、光と水が織りなす美術館のようだった。
一部を切り取って枠に組み込めば、それは最高の芸術品として誰もが目を奪われてしまう。
そんな光景であった。
翔はその光景に見惚れながらも、視線を中心へと向ける。
湖の中に下半身を沈め、上半身を水面から出した裸体の少女がいるのに気がついた為だ。
すると、後ろを向いていた少女がゆっくりと振り返る。
二人は無言のまま見つめ合うと、少女の方から口を開いていた。
「また……お会いできましたね……」
「また?」
まるで愛を形にしたかのような優しい微笑み。
だが、天使のような笑顔の裏に何か含みを感じたのは、自分の考えすぎなのかどうか翔には分からない。
一瞬の躊躇はしたものの、翔はゆっくりと近づいて湖に入ってい

った。
「……」
一歩一歩、水をかきわけて少女へと近づいてゆく。
少女はその様子を見ていても、笑みを崩さずにその存在を誇示し続けている。
そして翔が目の前まで来ると、少女は両手を求める様に伸ばした。手を翔の首に回してぶら下がると、二人の瞳は数センチほどの距離を残して見つめあう形になっていた。
突然の事に少し驚きながらも、翔は抗うことなく二人の鼻がつきそうな距離のまま問いかける。
「君は……誰だ……？」
その言葉を聞くと、少女は一瞬だけ悲しそうな表情を浮かべる。幻想的な風景も相まってか、酷く心を抉る顔だった。
「何か傷つけるような事を――」
翔は堪らず言葉を掛けようとしたのだが、
「！」
言葉を途切れさせたのは、少女の無理に浮かべた笑顔と頬を伝う涙を見てしまった為だった。
一粒の雫が湖に落ちて微かな波紋を引き起こす。
それは少女の感情を映す鏡のように、小さい揺らめきを残していた。
その瞬間――翔の頭の中に痛いくらいの情動が駆け巡る。

雷に打たれた様な衝撃を受け、すべてを思い出したかのように、
「おまえは！み――」
何かを続けようとした翔の唇は、少女の唇に塞がれていた。
頬を伝う涙を拭う事なく数秒の邂逅を終え、ゆっくりと体を離すと少女は告げる。
「愛しています。誰よりも」
その言葉を告げた瞬間――景色が揺らぐ。
「待ってくれ！俺はまだ！」

何か言おうとする翔の思いを打ち砕くように、静かに世界は崩れた……。

二章　異変の予兆

◇　◆　◇

雨が地面を叩く音に容赦がなくなり始めている。
そんな中で自慢の金髪が濡れるのを厭う事もなく、倒れている人物に叫ぶ男がいた。
「おい！　どうしたんだ！　大丈夫かよ！」
誰もが分かる異常事態に、顔面を蒼白にしていた。
こうなった経緯は数分前の偶然が生み出した産物だったのだ。

学校から帰宅していた大地は、ひょんな事から外出する事を強いられてしまった。
窓から見える景色は、誰もが躊躇してしまうほどに気分を鬱屈とさせる眺め。
傘を手に持ち玄関の扉を開けるが、その光景には溜息が出るのを隠せなかった。
「姉ちゃんの奴……。いつも横暴なんだよ……」
携帯電話に姉から着信があった時の嫌な予感が的中してしまった事に、軽く諦めを浮かべて大地は傘を開いた。
断る前に告げられた、ビールを買い置きしておけという指示を投げ捨ててしまおうかと思うが、大地の脳内ですぐにその意見は棄却されてしまった。
逆らうという事が、自分に齎す（もたらす）であろう悲劇を想像してしまったが為に。
外に出て間もなく、靴に染み込んだ水の嫌悪感に顔を歪めながら、

大地は歩を進めていた。
そして、手に持っている物の存在理由さえ疑い始めていた頃だった。
「公園から行った方が早ぃよな」
呟いて、公園を通り抜けようと足を踏み入れる。
道路のようにアスファルトで整備されてないそこは、思った以上にぬかるんでいて歩きにくいようだ。
そして、出口がそろそろ見え始める場所に差し掛かった時に、大地は動きを止めた。
その理由は目に映る奇妙な物の存在だった。
「あれは……人か？」
雨のせいで視界が悪いが、それは人に見えていた。
少しずつ近づくにつれて、その姿がはっきりとし始める。
そして、それが人だと確信する頃には走り出していた。
「あれ、ぅちの学校の制服じゃねぇか？」
それに気がつくと、更に急ぎつつ駆け寄る。
その人物の場所に辿り着き、うつ伏せのまま倒れてる男をひっくり返すと、大地は愕然として言葉を失ってしまった。
そして、冒頭へと至るというわけであった。

——なんで翔がここで倒れてるんだよ！
戸惑いは焦りを伴って、冷静な判断力を失わせる。
大地は息をしているかどうかも確かめようともせずに、翔の体を掴み、
「翔！　起きろって！」
雨の音を掻き消す程の声で叫ぶ。
——まさか、死んでるのか……？
現実的に知り合いがこんな所で死ぬ姿など想像する方が少ないだ

ろう。
出来事として、あながち間違っていないのが皮肉な事ではあったが。
「翔！　死ぬな！　翔――――！」
声を上げて、思い切り揺さぶると、
「うるっせーな。なんなんだよ……」
翔は顔を顰めながらも、薄目を開いてそう呟いた。
大地は反応があった事に本気で安堵し、翔の両肩に手を置きながら返事をしていた。
「生きてたか……」
「何を言ってんだよ。人を勝手に殺すな。なんで俺が死ななきゃなんね――」

そこにふと翔の頭に疑問が浮かび上がった。
――なんでどこも怪我してないんだ？
翔はあの出来事を思い返して自分の右腕に目を落とした。
あの時。
スキンヘッドの男に蹴り飛ばされた瞬間に、自分の腕が折れる音を聞いたはずであった。
少なくとも何も痛みもないのはおかしい。
それにその男の姿がここにはないのも理解しがたい現実でもある。
翔が考え込むように黙ると、大地は心配そうに声を掛けた。
「とりあえずさ、俺のうちに来てシャワーでも浴びろよ。なんでこんなとこに居たかはその後で聞くわ」
大地は翔を支えながら立たせて、二人がちゃんと入るように傘を差す。
「……あぁ。わかった」
翔は本当の事は話せないと思いながらも、そう答える事しかでき

なかった。
　右手の事が気になり、開いたり閉じたりを繰り返すが違和感もない。
夢だったのかと思いたかったが、近くに倒れた木があれを現実のものとして翔に突きつけていた。
「……」

その様子を見ていた大地も何か言いたげであったが呑み込む。
そして、大地は無理に笑顔を浮かべると、
「ここまで濡れてたら傘の意味ないな」
「そうだな……」
翔が相槌をして、そのまま二人は公園を去って行った。

二人がいなくなった後――
「よかったのかなー？彼に連れていかせちゃってー」
誰もいなくなったはずの公園の自販機から声が発せられる。
そして、一人の少女が自販機から顔を出した。
「ええ。今は彼に私の姿を見られるわけにいかないから。それくらい分かっているでしょう？」
　自販機のすぐ上の木から返事が聞こえると、一つの影が音もなく地面へと降り立った。
「まぁそうですよねー。イレギュラーで彼が来ちゃったけど、結果的に連れていってくれたのは正解なのかもですねー」
「そうね」
　雨が自分を濡らすのを気にもせずに女は答えると、静かに目を閉じた。

大地の家は公園からそう遠くはない。
普通に歩けば五分もかからない距離だろう。
翔は泥だらけの制服が肌に張り付いて気持ちの悪さを感じながらも、あまりに普段どおりの体の調子に逆に奇妙な感覚を味わう。
二人は終始無言のまま歩き続けた。
しばらくして、二人は無事に大地の家に辿り着いていた。
「今開けるから」
大地はポケットに手を突っ込むと、鍵を取り出して扉へと差し込んだ。
『カチ』という音と共に扉が開かれ、玄関に入った大地は少し待ってろと言い残して奥へと姿を消した。
間もなくして上半身裸のまま戻ってきた大地は、バスタオルを翔に向かって放り投げると、
「上がれよ。今は姉貴がいないから脱いじゃってもいいぞ」
「悪い。っていうか初めてだな。お前の家に来たのは」
翔はそう話しながら、濡れて張り付いたローファーを脱ぐのに苦戦していた。
やっとの事で脱いだローファーを玄関に転がすと、大地の言うように制服も全部脱ぎ、下着のみの格好となった。
「あー……。俺さ、家に人いれた事ないんだわ。姉貴と二人暮しってのもあってな」
「そうだったのか」
渡されたバスタオルで体を拭きながら、先ほどから気になっていた右腕を見るが、
「痕すらないか……」

怪我らしい怪我もなく、どこを見てもそれらしき傷も体のどこにもなかった。
「……」
あの出来事が夢ではないのだとしたら、なぜ自分は無傷なのか？その上意識を失っていたのはどうしてなのか？と、翔は一人で考えに耽る（ふける）。
するると、
「とりあえず、そっちが風呂場だから入ってこい。着替えは俺のでいいよな？」
「あぁ。何から何まですまないな」
翔は考えを一旦中断すると、申し訳なさそうに顔を歪める。
「何言っちゃってんのー。俺と翔ちゃんの仲じゃない」
「……」
大地が屈託なく浮かべる笑顔に思わず呆けてしまっていた。
そして、ゆっくりと翔も笑みを浮かべる。
――さっきまでの違和感はこれか。
大地が普段と違うのにも気づく余裕さえなかったのか、と翔は考える。
「気、使わせちまったな……」
「なんの事だよ？　いいから早く入れって。まさか！　それとも一緒に……？」
大げさに目を見開く大地に苦笑いを返し、
「それは勘弁だな」
そう言いながらも、心の中では感謝していた。
そして、進められた通りに浴室へと向かっていった。
「あったまるな……」

翔が浴槽に浸かりながら体を広げると、不意にあの痛みが襲った。
「ぐっ……」
その痛みの事は色々ありすぎて頭から抜け落ちていたが、それはいつも急にやってくるものであった。
ただ、いつものと違ったのは変な映像が目を瞑ったら見えた事だろう。
こんな事は今までに経験したことはなかったのだ。
「これは……どこ、だ？」
それも一瞬の事で、すぐにその映像は消えてしまった。
「湖……か？」
幻想的な景色の中で湖のようなものが映った気がしていたが、翔にはそれが見覚えもないものであった。
そして、次第に痛みも収まり、もやもやした気持ちのままで翔は頭ごと湯船へと沈めた。

◇◆◇

茜たちはいつもの三人で喫茶店にいた。
本当はそのまま帰るつもりだったはずが、崩れ始めた空模様に雨宿りのつもりで学校の近くの喫茶店へと立ち寄っていたのだ。
「結局さぁ。どうなわけ？」
「え？　何が？」
不意に自分に向けられた里佳の言葉の意味が分からず、茜は訊き返していた。
「とぼけなくってもいいってぇ。翔の事だよぉ」
「な、何よいきなり」
茜は予想もしていなかった翔の話題のせいで狼狽し、手に持ったアイスティーを零しそうになっていた。
倒れそうになったコップを支え、軽く睨みつけると里佳は悪びれも

せずに続ける。
「だってさぁ、見ててバレバレなんだもん。いつも幼馴染って誤魔化すけどぉ、ぶっちゃけ好きなんでしょ？」
「……っ！」
そう言われ、黙りこんでしまう茜。
だが、すぐに慌てたように両手を振ると、
「ち、違うの！」
茜の頬に朱が差す。
黙るという事が肯定することになると思い否定するが、すでに里佳には通用しないようだった。
ふーん、と疑わしい目を向けた後。
里佳はニヤニヤと笑いながら隣に座っている香苗に話を振った。
「香苗だってそう思ってるよぉ。ね？　香苗」
「え、えぇ……」

「？」
いつもとは様子が違う香苗の歯切れの悪い回答に、疑問符を浮かべる里佳と茜。
互いに目を見合わせると、
「そういえば、最近元気ないよね？」
「どうかしたぁ？」
ここぞとばかりに、話題を変えようと茜が問いかけ、里佳も香苗の方に興味が向いたのか続いた。
香苗はハッとしたように驚いた顔を浮かべると、
「な、なんでもないよ。気にしないで」
「？？」
その様子に、ますます疑問に思ってしまうが、
「このケーキおいしいね」
微笑みながらおいしそうにケーキを頬張る姿は、すでにいつもの

香苗だった。
その為、この後は茜たちも大して気にせずに会話を楽しんでいたのだ。
あの変化にもっと早く気がつけばよかったと、後に後悔する事になるとは知らずに……。

◇　◆　◇

時を同じくして——
「結局なんだったんだ？」
図らずも茜と同じような質問を受けた翔はすでに風呂から出て、大地の部屋で胡坐を掻いていた。
茜の受けた質問とは、内容の明るさが正反対ではあったが。
「見なかった事にしてくれってのはなしか？」
大地はその回答にしばらく考え込んだかのように黙った後。
真剣だった顔を崩すと軽い調子で言った。
「いんや。お前が話したくないって言うなら深くは聞かないぜー」
「すまない……」
翔が顔を俯かせる。
「ただよ？お前が困ってるのを指を咥えて見てるだけ、なんていう付き合い方をしてるつもりはないんだぜ？なんか事情があるならしょうがないけど、話してくれないってのは友達としては寂しいもんだ」
「……」
「なーんちゃって！　柄にもない事言って悪かったな。話したくなったらしょうがないから聞いて、や、る、よ」
にしし、と屈託なく笑う大地を見て、思わず翔にも笑みが零れる。
——これでいい。大地まで巻き込みたくはない……。

その後は二人でゲームをしたり、漫画を読んだりして時間を潰した。
大地のおかげで、さっきまでの沈んだ気分は大分よくなっていた。
そんな時間をしばらく過ごした時の事だった。
「ただいまー」
玄関のドアの開く音と共に、女性の声が家の中に木霊する。
「げ……今日は遅くなるんじゃなかったのかよ」
「お前の姉さんか？」
「あぁ。あいつが帰ってくると多分めんどくさい事になるんだよなぁ……」

心底嫌そうな顔をしながら言い、深い溜息をつく。
「そうなのか？」
「まぁ……見てれば分かるって」
ペタペタとスリッパの音を響かせて大地の部屋の前で音が止まると、
「大地ー。私とってもお腹空いたんだけどー……ってあれ、どなた？」
部屋のドアが開かれ、そこに立っていたのは大地のお姉さんとは思えないほどの長身の美人だった。
茶髪の髪に着崩したスーツが、奇妙なコントラストと共に逆にその魅力を引き出しているようにも見える。
普通ならば敬遠されがちな赤という派手なスーツも、その大人の雰囲気によく馴染んでいた。
「お邪魔してます」
「あら、大地が友達連れてくるなんて初めてじゃない？　へー、随分とかわいい子を連れてきたじゃないの……」
翔は向けられた視線になぜか妙な震えを覚える。
艶っぽく潤んだ唇が小さく『おいしそう』と動いたのは錯覚だと信じて、その視線から目を逸らした。

「うるせーな。飯は作るからあっち行っててくれよ」
「ふーん……。そういう態度を取るんだ」
「い、いや。とりあえず待っててくれよ」
強気な態度で接したと思ったらすぐに弱気になる大地を見て、翔は手で口を押さえた。
笑い声を噛み殺しながら、視線を二人に向ける。
まだ続いている会話を聞いていれば、なんとなくその姉弟の力関係を察する事ができる。
翔は恐らく完全に上下関係ができているのだろうと思いながらも、その光景を妙に羨ましく感じていた。
何故？　と問われれば、その答えは持ち合わせてはいないと感じつつ。
「分かったわ。あっちで着替えてくるから覗かないでね」
「誰が覗くか！」
大地の姉はバタンと扉を乱暴に閉めるが、同時に部屋の外からは声が聞こえてきた。
「そっちのかわいいお友達は大歓迎よー」
語尾にハートマークさえ付きそうな程に弾んだ声。
翔にはなんとなく大地がめんどくさい事になる、と言った意味が理解できていた。

「台風みたいな人だけど綺麗な人だったな」
突然現れ、一瞬にして部屋の空気を変えていった大地の姉に、ある種の感嘆を含んで翔は呟く。
「外見だけだよ……。中身は男だ」
大地のその言葉には苦笑いしつつも、
「姉弟……か」
「なんか言った？」
「いや、なんでもないよ」

不思議そうにこっちを見る大地に、首を振り否定する。
姉弟という言葉を口にした瞬間の心を締め付けるかのような寂寥感。
翔には、なぜこのような気持ちになるのか自分でも分からなかった。
「なんでこんなに切ない気持ちになるんだろうか……」
翔が誰にも聞こえない様に口の中で呟くと、
「とりあえず飯を作ってくるわ。早くしないとうるさいからな。お前も食っていくだろ？」
大地の問いに思考を中断させて顔を向ける。
「あぁ。そうさせてもらうかな」
大地の誘いに断る理由もない翔は素直に頷いていた。
「了解。適当に待っててくれ」

そのまま部屋を出て行く大地の後ろ姿を見送った後の事だった。
「ん？」
一人きりの部屋で何かが震えているような物音が聞こえたのだ。
音源を探そうと視線を周囲に巡らせると、それが何かに気がつく。
自分が置きっぱなしにしていた携帯電話が着信を知らせていたのだ。
座ったままの姿勢で手を伸ばして携帯電話を手にすると、
「誰だ……？」
着信していた番号は登録すらされていない初めて見る番号だった。
出るかどうか迷ったが、ずっと鳴っている電話に仕方がないと思い、通話ボタンを押して耳に当てる。
それは思わぬ相手からの電話だった。
「里佳？」
「出るの遅いっての。すぐに出なさいよぉ」
相変わらずの態度だが、翔はふと疑問に思った。

「なんで俺の番号を知ってるんだ？」
「悪いとは思ったんだけど、茜の携帯見せてもらったのよ。それでね、さっきまで茜と香苗の三人でお茶してたんだけどぉ、二人が消えちゃったのよねぇ」
「消えた……？」
突然電話をしてきたかと思えば、会話の内容も常軌を逸している。
里佳の性格から鑑みればふざけているのかと思ったが、それも違うようだった。
「二人してトイレに行くって言ったまま帰ってこないから、さっきトイレ見にいったんだけどぉ、誰もいないのよねぇ。しかも二人とも鞄も置きっぱなしで、どうしろって感じぃ」
「ならすぐ戻ってくるだろ？」

「でももう一時間だよ？」
その話が本当だとしても、翔にはなぜ自分に電話をしてきたのかが分からなかった。
わざわざ茜の携帯電話を調べてまで翔を選ぶ理由がないのだから。
翔はそれを里佳に問いかける。
「だからってなんで俺に電話してくるんだ？」

「それがね、香苗が少し前に言ってた事思い出したんだぁ」
「どういうことだ？」
「私にはよくわかんなかったんだけど、なんか不思議な事あったら翔に伝えといてって言われたのよぉ」
「俺に……？」
翔と香苗との接点はそれほどないはずだった。
いや、無いと言っても過言ではない。
成り行きで紫苑の学校案内の時に一緒にはなっていたが、それまでは挨拶すら数えるほどしかしていなかった。
それなのに何故翔にそんな事を伝えろと言ったのか。

「どういう事なんだ？」
　言葉にしてもその答えなど見えるはずもない。
だが、今日一日で味わった奇妙な出来事のせいか、それほど驚くほどの事でもなかった。
ただそれが、今日の出来事になんらかの関わりがあるのかどうか、というのは気になる所ではあったが。
「どういう事って言われても分からないしぃ。香苗にもなんで？って訊いたんだけど何も言わないしさぁ。まぁいっかなぁーって気にしてなかったぁ」
「……そうか。分かったよ」
　何かしらの理由はありそうだと考え、翔が黙りこむと、
「あたしはどうすればいいと思う？」
　里佳が翔に問いかける。
「それは自分で決めてくれ。俺はしらん」
「何それぇ！　つっめたーい」
「とりあえず、話は分かったから切るぞ」
「ちょ、ちょぉっと待ってよぉ！」

　慌てる里佳の言葉などすでに聞いていないようで、翔は通話終了のボタンを躊躇することなく押していた。
その結果、里佳の持つ携帯電話からはツーツーという切断を示す音だけが聞こえてくる。
里佳は手に持つそれを見つめながら、翔の容赦ない扱いに唇を尖らせると、
「まったくなんなのよもぉー」
　周りの身勝手さに苛つき、残っていたジュースを一気に飲み干す。
そのまま里佳は訳も分からない思いを抱き、テーブルにへたり込んでいた。

電話の後。
翔はさっき里佳と話した事について考えていた。
香苗から聞かされたという不思議な事があったら翔に伝えて欲しい、という言葉。
それをなぜ翔に伝える必要があったのか？
それに不思議な事とは一体なんなのか？
重大な何かを見落としている気がしていた。
翔が考えすぎてショートしそうな頭を抱え、一人悶えていると、
「！」
その時、稲妻に打ち抜かれたような衝撃が頭に響いた。
「俺の周りに起きている事も含めてそう言ってるんだとしたら、香苗は何か知っているのか……？　しかも、これから何かが起きると知っていたからこそ、そんな事を里佳に伝えたのか？」

そう考えれば説明する事は出来る。
ただ、それは想像にしか過ぎないのだ。
想像の域を出ない思考は偏見を生み、偏見は虚偽を真実として認識してしまう恐れすら孕んでいる。
それはとても危険な事であり、真実に対して盲目になるという事は悲しい結果を生み出す事もあるのだ。
「考えても無駄、か」
翔は呟くと、ベッドに寝転んだ。
すると、
「おーい。できたぞー」
その声と共に部屋の扉が開かれ、エプロン姿の大地がそこに立っていた。
「おう。わかっ──」
翔が体を起こして返事をしようとするが、その言葉は途中で止まった。

何故なら、その姿がとてつもなく似合ってないからだった。
知り合いでなければ不快にさえ思ってしまうかもしれない程に。
金髪にピアスの男（しかも大地）にエプロンがこれほどに最悪な組み合わせとは、翔も思っていなかった。
そんな呆けた顔の翔の姿に眉根を寄せ、大地は手に持ったおたまを部屋の外へと向ける。
「飯ができたから早く行こうぜ」
これがとどめだった。
自分は料理が大好きです、と大地が言っているような錯覚を起こしてしまったのだ。
「あはははは！」
もはや、隠すことなく声を上げる。
目の端には薄く涙を浮かべ、大地を指を差して仰け反っていた。
そんな翔の姿に大地は顔を赤くしながら、
「笑うな！　失礼な奴だなぁ」
「だってお前、その格好……」

翔は大声で笑っていた。
さっきまでの真剣な考えなど吹き飛ばしてしまうほどに。

それからやっと笑いの収まった翔が大地の後に続き、居間に辿り着く。
するとそこには、二人が来るのを待っていたのか、ビールを片手にして胡坐を掻いてテレビを見ている大地の姉が居た。
翔はその姿に唖然とする。
誰でも同じような反応をしたに違いない。
彼女の格好は肩の開いたTシャツ一枚に、下は……下着のみなのだ。

露わとなっている太腿は細くしなやかな曲線を描き、Tシャツを盛り上がらせる膨らみは見る者の脳髄を掻き乱す。
はっきり言って目の毒としか言いようがなかった。
翔が居間の入り口で立ち尽くしていると、
「友達居る時くらいはちゃんとした格好しろよな。まったくよぉ」
大地が食事を並べながら姉に向かって言う。
だが、本人はその言葉に全く気にする様子もなく、
「やーよ。暑いじゃない」
しれっと言い放った。
ビールを手にしながらテレビを見ている様子や、堂々とした態度は確かに男みたいではある。
ところが、見た目がまったくそれに伴っていないのだ。
時折覗かせる鎖骨には色気が漂い、ビールを飲む下す時の喉の動きからは何故か目を離す事が出来ない。
その存在感は、既に才能と称してもいいほどに昇華されていた。
「まぁ、姉貴はいつもこうだから気にしないでくれよ」
そんな姿にもう慣れてしまっているのか普段どおりにしている大地の言葉に、翔はハッとして目を背ける。
自分がどれだけ失礼な事をしていたのかに気づいたからだった。
それから皆が食事を取り囲むように座ると、
「私は詩織って言うの。よろしくね、ぼーや」
「水鏡翔と言います。夕飯まで頂いてすいません」

「大地だ。みんな俺の前にひざまず――」

「「黙ってろ」」

二人が全くの同時に言うと、翔と詩織はお互い目を合わせて笑った。
「なんでいつも俺だけこんな……」

がっくりと肩を落とす大地だが、その様子を見て楽しんでいる二人の事にも気づいていた。
大地は横目でそれを確認すると、口を横に広げる。
家に辿り着いたばかりの時に浮かべていた翔の表情。
それは大地にとっては見たくもないものだった。
翔に何が起きて、何に悩んでいるかは大地には分からない。
話したくもない事を無理に訊くつもりもなかった。
ただ、少しでも笑っていて欲しい。
少しでも気が紛れれば、と思っていたのだ。
それは根が優しい大地のささやかな想いだった。

◇　◆　◇

既に雨は上がっており、それが地面を打つ音はしなくなっていた。
「分かっているわ……」
小さな呟きが寒々しい空間に響く。
暗闇に包まれたここで彼女は誰かと会話をしていた。
そこは最近完成した新しいマンションで、オートロックも完備。
防犯対策は一階の入り口に警備室があるほどの徹底振りで、安全面ではSクラスの建物である。
当初、建設するにあたり周辺住民の反対が多数あり、去年の暮れには完成するはずだったこのマンションは最近になりようやく完成する事となったのだ。
この騒動の一端は二十四階建てという高さの為、周辺の住民が自宅の日照権を巡っての争いだったと言われている。
彼女が居るのはそんな高級マンションの最上階にある一室。
電気もつけずに窓が開け放たれた部屋の中には、外から生暖かい風が流れ込んでいた。

彼女の前髪は風に揺らめき、隠していた瞳を映しだす。
周囲の闇を吸い込むかのように本来の色を失った瞳には、映し出されるものは何もない。
それもそのはず。
見た目からも二十畳はあるこのリビングには何もないのだ。
テレビも、コンポも、食事するのに使うはずであろうテーブルでさえも。
少女は壁に寄りかかり、片膝を抱えるようにして座りながら右手に持つ携帯電話へと話しかけていた。

「大丈夫よ。彼があまりにも危険な立場にいるのかは分かってるわ。既にどうやっても戻れない事も」
聞こえてくる彼女の声は淡々とし、告げている内容はあまりにも異質。
一片の優しさも含まないその声に、もしもこの場に他の者がいれば言い知れぬ恐怖を覚える事だろう。
「何も知らない今はいいけど、全てを知った時に彼がどちらに転ぶかはわからないわ。えぇ……できる限りはするつもりよ。心配しなくていいわ」
外では雲に隠された月が、時折その姿を覗かせる。
部屋に差し込む月光に照らされた少女の横顔は美しいが、儚げだった。
消えてしまいそうなほどに……。
もし、笑顔で皆を暖かな気分にさせる茜のような女の子を太陽と例えるのならば、彼女は月だ。
美しさとは裏腹に冷徹とも思えるその表情は、身も心も貫く冷たい一本の氷の矢。
誰もが目を細める太陽の輝きは眩しいもので、その存在を強く感じるもの。
その逆に月はその存在を誇示しない。

目を向ければその素晴らしさに目が向くものの、その存在を意識する事は少ないのだ。
どこか寂しさを覚えてしまう。
そんな存在。

「ええ、そうよ」
一点に向けられる少女の瞳は何を映しているのか分からない。
簡単に他人に理解できるような世界が見えているのなら、このような空気を作りだすこともないだろう。
「彼が受け止めきれないようなら……。それは平気、最悪の事態にはならないわ。安心して……」

彼女はその言葉を最後に、通話終了のボタンを押して携帯電話を閉じた。
不意にまた月を雲が覆う。
部屋にあった唯一の光源がなくなり、少女の顔を窺い知る事はできない。
明るい太陽の下であっても、彼女の本当の素顔は誰にも見る事などできはしないのだが……。

「もし、対処できないようなら私が……」

彼女は呟き、ゆっくりと立ち上がる。
そのまま制服のスカートを払い、リビングを出ると洗面所へと向かった。
その途中。
朝に制服に着替えるときに脱ぎ捨ててあった寝着を抱え、洗面所の電気をつけて中へと入る。
洗面所に入ると手に抱えた寝着を洗濯籠に入れ、彼女はおもむろに制服を脱いで入浴の準備を始めた。

すべて脱ぎ終えた後、傷ひとつない裸体を晒す。
触れれば壊れてしまいそうな細い体躯は、何かを背負うにはあまりにも頼りなさ過ぎで、あまりにも小さい……。
そして彼女は鏡に映る自分を見つめながら、先程の言葉の続きを囁くような声の大きさで口にした。

「私が……殺すわ……」

こうして長い、本当に長い一日は終わりを告げた。

三章　新旧闘乱

◇　◆　◇

あの後。
大地の家で楽しい食卓を囲んだ翔は、二人に世話になった事に対する感謝を伝え、自宅へと帰っていた。
「結局、分からない事がいっぱいだな……」
自分を襲った男の事、紫苑の言っていた事、里佳に伝えられた香苗からの自分への言伝、そのどれもが自分の理解が及ばない所で起きているのを知ってしまった。
そして、そのすべての中心に自分が居るという事に少なからずの困惑を浮かべている。
「協力すればすべてを教えてくれる、か……」
妙に疲れのたまった体は自分のものではないかのように動きからは精彩さを欠き、ベッドに寝転ぶ翔の視界は少しずつ暗闇が覆い始めていく。
そう呟いた事さえ自分の意思なのか分からないままに、その部屋は小さな寝息だけが支配するだけの空間になっていった。

朝を告げる日の光がカーテンの隙間から差しこんでいた。
どんな不思議な事に巻き込まれようとも、万人に同じように朝はやってくる。
それは翔にとっても例外ではない。
目を覚ました翔が最初に目にしたものは見慣れた天井だった。
「夢を見ていた気がする」

そう呟くが、それがどんな夢だったかはまったくと言っていいほどに覚えていなかった。
ただ、妙に悲しい夢だった気がする。
心にぽっかりと穴が開いたみたいな、手に持っていた大事な何かが指の隙間から零れ落ちていってしまったような虚無感。
そんな気持ちを抱いてしまっていたのだ。
「用意するか……」
翔はそう零すと、階下にある洗面所へと向かう。
洗面台の前に立つと、顔を洗うために蛇口を捻った。
そのまま何気なく鏡を覗き込むと、
「これは……」
毎日見ている自分の顔に違和感を持った。
目の端から頬を辿り、顎までの軌跡を描きだしている一本の薄い線。
それは、
「涙の……痕か？」
当然の事だが、起きてから涙を流した覚えはない。
必然的に寝ていた間に流したという事になるのだろう。
それが先程から感じている寂しさの影響なのかは分かりかねるが、何かしらの関係があるとしても不思議ではなかった。
「おかしな事ばっかりだな」
翔は自嘲的に吐くと、そのまま顔を洗い出だした。
涙の痕が早く消えるように、と。

「あら翔、今日はちゃんと起きたのね。ご飯できてるわよ」
洗面所を出てから部屋で制服に着替え、すべての支度を終えてリビングに行くと、既にテーブルには朝ごはんが用意されていた。
海苔に納豆、白米とわかめの味噌汁。
定番の和食メニューだ。
出来立ての味噌汁からは湯気が出て、普段であれば起きがけの体に

染み渡り目を覚ましてくれるはずが、今日に限っては食べる気にさえならなかった。
「今日はいらないから」
「え？ちょっと、もう行くの？」
リビングを出て玄関に向かおうとする翔に、エプロンで手を拭きながら母親が問いかける。
現在の時間は七時半。
確かに学校に向かうには早い。
こんな時間に学校に向かうために家を出るのは初めての事。
母親としてもそれを不審に思うことは当たり前だろう。
「あぁ。今日はなんとなくだよ」
「そう……気をつけて行くのよ」
翔の母親は何か感じるものがあるのか、妙に心配そうな表情を浮かべたままそう答える。
「いってきます」
翔は玄関の扉を開きながらそう言うと、そのまま出ていく。
母親は翔の出ていった玄関の扉をしばらく見つめたまま立ち尽くしていた。

「こうなる予感はしてたんだよ」
翔は学校へ向かう途中にある公園のベンチに座っていた。
もちろんそれは前日の事件があった公園。
あんな事があったのに、そこに居る事ができる自分の楽観さに不覚にも笑ってしまいそうにさえなる。
だが、なんとなくここで確認したかったのだ。
昨日の事が幻や妄想の類ではないという事を。
それが実際の出来事だと示すように、そこには生々しい傷跡を残していた。

倒れた木は半ばから断たれており、大男が折った時のままになっている。
こんな相手によく生きていたものだ、と翔は薄く溜息をついた。
「考えは纏まったのかしら？」
不意に後ろから聞こえてきた声が誰のものかなんて、確認するまでもなかった。
そんな喋り方をするのが誰かも分かっていたし、このタイミングで来るなら彼女だという事は翔も理解していた。
「そうだな」
後ろを向く事なく答えた翔は、そのまま続ける。
「最初は狙われてるって言葉も信用してなかったんだけどな。でも実際に昨日襲われてロスターという存在の脅威が身に染みて分かったんだ。もちろん紫苑たちの事を完全に信用した訳じゃないけど、このまま一人で悩んでても解決するとは思えない」

「……」
紫苑は無言のまま翔の背中を見ていた。
「だからさ……協力するよ。何も分からないまま殺されるのも嫌だし。詳しい話を教えてくれ」
紫苑は一瞬の間を置くと、
「賢明な選択だと思うわ。もしもあなたが断ったとしたら、強引な手段を取るつもりでいたから」
そんな容赦のない言葉にも翔は笑みを浮かべていた。
そんな言い方しかできない紫苑が、言葉の意味ほど冷たい人間には思えなかったからだ。
ただ少し不器用なだけ、そう感じた。
「それで話してくれるんだろ？」
翔はベンチから立ち上がると、後ろに振り返った。
すると、

「その前に行かなければならない場所があるわ」
「行かなきゃいけないとこ？」
紫苑はそうよ、と告げると、おもむろに携帯電話を取り出した。
「私よ。ええ。いいからすぐに来て」
一方的な物言いで携帯電話に告げると、すぐに切ってしまった。
あれでは電話の相手が大変そうだと感じつつ、翔は苦笑いを浮かべるしかなかった。
先程、自分が感じた紫苑は不器用なだけ、という考えに訂正を加えたくなってしまったが為に。
「すぐに来るはずだから、入り口で待ちましょう」
翔はその言葉に相槌を打つと、既に歩き始めている紫苑に追随するように横に並ぶ。
「どこに向かうのか教えてくれないのか？」
「必要無いでしょう。着けば分かる事よ」
「確かにそうだけどさ……」
腑に落ちないが、今はこれ以上何を言っても無駄だと感じ、翔は黙る事を選んだ。
それから、公園の入り口で迎えが来るのを待ってから数分が経った時。
「来たようね」
紫苑は不意に顔を上げてそう言う。
翔がその言葉に反応し、顔をそちらに向けると大通りの方から一台の大型の車がやってくるのが見えた。
全体的に黒で塗り固められているその車は窓ガラスに至っても黒で、中が見えないようになっている。
危なげなくこちらに向かうその車を見てみると、おかしな所があるのに翔は気がついた。
「誰も乗ってない……？」
その呟きはもっともだった。
現に、前から迫りつつある車の運転席も助手席にも誰かが乗ってい

るようには見えない。
だが、それでも車が動いているという事は、誰かが操縦していると仮定せざるを得ないのは当然の事だった。
誰も乗っていなければ車が動く事はないのだから。
「そんなはずがないでしょう。馬鹿ね」
驚きに目を見開かせる翔を、紫苑はあっさりと切り捨てて言う。
「いや、俺だって本気でそう思ってる訳じゃないんだけど……」
ふと漏らした言葉にそれほど辛辣な言葉が返ってくるとは思っていなかった翔は、若干不貞腐れたように零す。
紫苑の視線はそれでも反応を示すことなく車へと向けられていた。
そして車は二人の目の前に止まると、同時にエンジンの駆動音も消える。
そのまま運転席側の扉が開き、中から出て来たのは、
「いきなり電話が来たと思ったら、言いたい事だけ言って切っちゃうなんてひどいですよー」
頬を膨らませながら、先程の電話の対応について文句を言う少女の姿だった。
いや、少女と言うのは語弊があるかもしれない。
見た目は確かに少女と言ってもいいのだが、彼女は正真正銘の大人なのだ。
「思っていたより早かったわね？」
「紫苑ちゃんが急かしたんじゃないですかー！」
翔は二人の会話を聞きながら、運転席に誰も居ないように見えた原因を理解していた。
彼女の背丈ならばそう見えたとしても、それほどおかしい事ではない。
「まぁ、姫ちゃんが迎えに来るのはなんとなく予想してたけどな」
「随分と落ち着いていますねー？　こんな事に急に巻き込まれてると言うのに。何かあったんですかー？」
「いや……」

翔は一瞬頭に浮かんだ大地の顔を消すかのように首を振った。
千秋はそんな翔の様子に首を傾げながら、二人へと告げる。
「とりあえず話は中でしましょー。乗ってくださいなー」
「ええ」
「分かった」
翔と紫苑は返事をすると、車へと乗り込んだ。
運転席に乗り込んだ千秋はキーを回しエンジンに火を入れる。
そのまま千秋がアクセルを踏み込むと、車はゆっくりと発進した。

それからしばらく経った時、翔が重くなっていた口を開いた。
「なぁ。二人は俺に協力しろって言ったよな？」
「それがどうかしたの？」
「協力って具体的には何をすればいいんだ？」
助手席に座る翔に紫苑は答える。
詳しい話も何も聞いていない以上、翔がその疑問を持つのは当然だった。
「簡単に言えば、研究の手伝いですかねー？」
その質問には千秋が運転しながら答える。
「研究の手伝い？」
「そうですよー。私たちの研究の被検体として協力して欲しいんですー」
翔が横に顔を向ける。
「はっきり言ってしまえば、私たちの研究所にとって翔君は最高の素材なんですよー」
「本当にはっきり言うんだな」
千秋の言葉に悪意を感じ取れなかった翔は、素直にその言葉に苦笑いを浮かべた。
「隠してごねられる方が面倒なのよ」
「紫苑ちゃんー。そんな言い方しなくてもいいじゃないですかー」
千秋はその言葉を諌めると、翔の方を向きごめんとばかりに少し

だけ頭を下げた。
翔は気にしていない事を手で示すと、紫苑に話しかける。
「あのよ。紫苑ってさ」
「何かしら？」
「なんか無理してないか？」
翔の言葉に一瞬にして車には静寂が訪れる。
千秋は素知らぬ顔で運転を続けているし、翔からは後部座席に居る紫苑の顔を見る事はできない。
しばらくすると、
「……どういう意味かしら？」
紫苑がやっとの事でその質問に答えた。
「その喋り方もそうなんだけど。意図的に人を遠ざけてるっていうか……言ってる俺もよくわかんないんだけどな」
「……」
はは、と翔が頭を掻きながら言うが、結局、それに対する返答はなかった。

既に公園を出て三十分程が経とうとしていた。
その頃には周りを見渡してみると、すでに緑に囲まれた山道に差し掛かる所だった。
この時期の山は緑に彩られ、すぐ下の川は太陽の光を反射し、静かな景観を映し出している。
最初の頃は千秋がちゃんと運転できるかどうか翔も不安に思っていたが、取り越し苦労のようだった。
前見えづらそうにしているが、一応は問題ないらしい。
「そういえば、体の調子はどうですかー？」
各々が自分の世界に浸り始めている頃、千秋が不意に翔に語りかけた。

翔は窓の外に向けていた視線を外すと、
「体の調子？」
千秋の質問の意味が読み取れずに訊き返していた。
「そうですよー。右腕が折れてて痛そうだったけど、ちゃんと治ってるー？」
「ああ。特になんともな――」
意識することなく答えようとするが、その質問のおかしさに気づいた翔が言葉を止める。
驚きを顔に貼り付けて運転席の方に乗り出すと、
「なんでそれを知ってるんだ！？」
叫ぶように声を張り上げ、更に続けた。
「気が付いたら痛くなくて変だとは思ったんだよ！まさかあいつも紫苑達の差し金なのか！？」
翔は千秋の肩を掴んで揺らす。
「ちょ、ちょっとー。危ないですよー！　運転してるんだからー！」
翔の暴挙に車は大きく左右に傾ぐ。
「わりぃ」
自分がいかに危ない事をしていたのか気づいた翔は、少し落ち着いて自分の席に座る。
すると、紫苑が千秋の代わりに答えていた。
「昨日、私たちも公園にいたのよ」
「ちょっと待てよ。だったら俺があいつに襲われてるのも見てたって言うのか？
「そうよ」
にべもなく告げられ、翔は口を開いたまま言葉を失う。
見ていたのならば、なぜ助けてくれなかったのかという考えや、それを黙って見ていた事に妙な疑いまで生まれてしまったが為に。

「まさかとは思うけど、紫苑達が仕向けたんじゃないよな？」
紫苑達が公園にいて俺が襲われているのを黙って見ていたのならば、奴を差し向けたのがここに居る二人である場合も大いにあり得る。
この後、研究所で同じような目に遭う可能性も否定できない。
一回疑い出せば、思考の負の連鎖は留まる事を知らなかった。
「何を勘違いしているのかわからないけど、あれは私たちじゃないわ」
「そうですよー。私たちが駆けつけた時には、すでに翔君は倒れてましたからねー」
「駆けつけたって……。なんで俺がそんな事になってるって分かったんだ？　もし紫苑達が関わってないんだとしたら、すぐに駆けつけるなんてことできるはずないだろ？」
そうなのだ。
もしも紫苑達が目の届かない場所に居たとしたら、その状況を知り駆けつける事などできないはずなのだ。

「それはですねー。実は――」
「千秋」
千秋がその質問に答えようとする時の事だった。
紫苑が千秋の名前を呼ぶと、
「気づいてましたよー。随分としつこいお客さんのようですねー」
答えると、千秋は一気にアクセルを踏み込んだ。
急な加速は慣性の法則に従って翔を助手席に貼り付ける。
「ちょ、いきなりなんなんだよ！」
「黙っててくださいー！　喋ると舌を噛んじゃいますよー」
千秋は先程とは打って変わった激しいハンドルさばきで山道を曲がっていく。
人の手の加えられていない道は大きめの車が通るには細く、所々

に飛び出た木の枝が車の側面に当たる音がする。
土の色が剥き出しの路面は、進むたびに不快な振動が三人を襲っていた。
「一体、何だって言うんだよ！？」
激しい遠心力に左右に傾ぐ体を支えながら、翔は問いかける。
「追手よ」
紫苑は言いながら後部へと視線を向けていた。
翔がその答えに後ろを向くと、信じがたい光景が目に入っていた。
「冗談だろ……？」
その呟きはもっともだった。
これほどの悪路を苦にする事もなく、大型のバイクが砂塵を巻き上げて追いかけてくる様子が見て取れたのだ。
ヘルメットも被らずに追いかけてくる大男の姿を翔は見たことがある。
あのスキンヘッドに黒のサングラスを忘れるはずもなかった。
昨日、公園で翔に襲い掛かったあの大男だったのだ。

「なんであいつが……」
大男の姿を見たらその時の恐怖が翔を襲う。
腕をたった一振りしただけで、あの大きな木をへし折ったのだ。
あの蹴りを自分で受け、その力は身を持って体験している。
よく生きていたものだ、と今更ながらに体に震えが生じていた。
一発で意識を持っていかれそうなほどの衝撃。
あの反則なまでの暴力に対抗する術など、あるのかどうかも翔には想像すらつかない。
「大丈夫ですよー」
翔は意識しないうちに、強く握っていたのだろう。
握られた拳が震えていたのに気づいていた千秋はそう言っていた。
慰めにもならないその言葉だが、現状二人に頼るしかない翔はそのまま口を閉ざすしかなかった。

「あの程度の使い手に私達がやられる事はないわ」
「そーそー。私だけでも十分だよー」
根拠のない言動。
だが、二人の余りに飄々とした態度が、平気かもしれないという安心感を翔に与えていたのは確かだった。
その時——
大きな音と共に乗っていた車が揺れた。
何が起きたのか理解できない翔とは違い、紫苑には見えていたようだ。
「随分と、下品な戦い方ね」
そう言った紫苑の視線の先を確認すると、信じられない光景が翔の目に入ってきた。
こんな悪路で大きなバイクを片手で操り、走っている途中でもぎ取ったのか、男は自身の腕の数倍はあろうかという大木を手にしていた。
もはや笑う事しかできないのかもしれない。
もはやすでに常識など通じない世界なのだろう。
男が腕を振るうたびに車が大きく傾ぐ。
「んー……まずいですねー。さすがにこんな道ではバイクと車じゃ機動力が違いすぎますよー」
言うや否や、顔に翳りを見せる。
抜群の運転能力を見せていた千秋だったが、限界が来ていそうだった。
ますます細くなっていく道をかなりの速度で疾走していく二台。
なんとか逃れていた翔達だったのだが、男が起こした次の行動でついに均衡がやぶられる事になる。
先程まで振り回していた大木を、男は投げつけてきたのだ。
車に当たるかと思われた大木は車から逸れ、助かったかと思いきや、
「どこに投げてるんですかねー。へたくそなんだからー……って、

うぎゃー！」
外れたと思われた大木は、翔たちの乗る車を越えて前に落ちた。
かなりの速度を出していた車が急に止まるなどできるはずもない。
衝突する！と目を瞑った翔だったが、いつまで経ってもその衝撃は襲ってはこなかった。
恐る恐る目を開いてみると、
「あれ……？」
遥か後方で、車が木にぶつかり大破しているのが見えた。
あの一瞬でどうやって脱出したのかなど、翔には理解する術はない。
「危なかったですねー」
声がすると、翔の目の前には千秋の顔があった。
翔は慌てて動こうとするが、足が地に着かない。
不審に思い、自分の状況を落ち着いて見てみると、顔を引き攣らせた。
翔は紫苑に猫のように持ち上げられていたのだ。
「ちょ、ちょっと離してくれ！」
焦りと恥ずかしさから翔が頼むと、紫苑は掴んでいた翔の服を手離した。
翔は浮いていた体が重力に引かれ落ちていくのを感じ、受身を取ろうとしたが無様に顔から落ちてしまう。

「ぐえ」
——あんな細い体のどこにこんな力があるんだろうか……。
段々と現実離れした状況を目の当たりにしている翔は感覚が麻痺し始めているのか、冷静にそんな事すら考えていた。
そんな矢先に、
「悪いが状況が変わったんでな。そいつを渡してもらおうか」

翔が声のする方に顔を向ければ、大男がこちらに近づいてくるのが見えた。
すると、翔を庇うように紫苑と千秋が前に出る。
「それは残念でしたねー。上司の方に仕事は失敗したとお伝えくださいなー」
男を嘲るように言う千秋と、視線だけで射抜く紫苑を見ても男は怯む様子も見せない。
相当の自信があるのか、その歩みには迷いなど一切感じられない。
あれだけの技量を持っているのだ。
当然といえば当然とも言える。
「千秋」
一人現状についていけてない翔が全員の行動を少し後ろで見ていると、紫苑が千秋に向けて言い放つ。
それだけで千秋は理解したのか一度だけ頷くと、大男の方に一歩近づいた。
「ここは私の仕事みたいですねー。悪いですけどお帰り願いますー」
そう言うと翔の方をちらっと見て、笑顔で言う。
「大丈夫ですから、先に行って待っててくださいねー」
「大丈夫って……」

いくら本人が平気とは言っても、あんな大男を相手に一人で立ち向かうのを黙って見過ごしていいのか疑問に思う。
確かに役に立つ事などできないはずだし、ここに居るのが逆に足手まといになるかもしれない。
だが、このまま置いていくなど、本能が許しても理性が納得できるものではなかった。
翔が困惑に顔を歪めていると、
「行くわよ」
紫苑はその場で動けなくなっている翔を、強引に引っ張って奥に進んでいく。

「ちょ、ちょっと待ってって！　本当に大丈夫なのかよ！」
留まろうと力を込めても全く効果がない事に、半ば諦めながらも紫苑に問う翔。
「いいのよ。あれが千秋の仕事だから。私の今の優先事項はあなたを無事に研究所まで届ける事なのよ。それにあなたがあそこに居ても邪魔になるだけだわ」
納得したわけでもないが、それは事実なのだ。
翔はあの男になす術もなく、ねじ伏せられたことを思い出す。
そのまま苦々しげに口を歪めると、翔は体に込めていた力を抜いた。
「くそ……」
紫苑は無言のまま、そう吐き捨てて大人しくなった翔を引っ張っていった。

二人の様子に本能で何かを感じ取ったのか、鳥たちが逃げ出していく。
風が擦る木々の揺らめきも、妙に周囲にはっきりと響く。
「随分親切なんですねー。黙って行かせてくれるなんてー」
二人は静かに向き合っていた。
これから戦うとは思えないほどの落ち着きを見せて。
「知れた事を言う。二人同時に相手するのは俺でも骨が折れる。お前を倒した後に追いかければいいだけの話だ」
「あらあらー？　私のことを随分甘く見てくれるもんですねー」
「甘くなど見てないさ。知っているぞ、新島千秋。別名ハイド・ザ・スナイプと呼ばれるお前の事はな」
余裕の表情を見せていたはずの千秋の目元がピクリと動く。

そして、すぐに笑みを顔に浮かべて答えた。
「懐かしい名前ですー。知っていても向かって来るんですねー？」
「ふっ、お前たちは古い。主の下で力を授かった我らに負ける要素などない」
「じゃあ試してみましょうかー」
言動こそ変わりないが、男の言葉に一つの可能性を見出し、千秋は誰にも聞こえる事はないほど小さな声で一人呟いた。
「思ったほど簡単ではないかもしれませんねー……」
息を吐くと、千秋は地面を蹴って飛び出していた。

拳が生み出す風圧がうねりとなって千秋の髪を掻き乱していた。
二人が激しく動いた後に残るのは、踏みしだかれてその身を横たえた草花たちの姿だった。
「っととー」
千秋は大男の力任せな攻撃を避け続けている。
拳が通り過ぎた後に聞こえる風斬り音だけで、その威力は窺い知る事ができる。
だが、それも当たらなければその効果を発揮する事はなかった。
確かに大きな体とは不釣合いなほど俊敏な動きは、常人からしたら反応できる速度を逸していた。
ただ、千秋にとってはこの程度の攻撃を避ける事は、児戯にも等しいものだったが。
「当たらなければ、ただの扇風機ですねー」
「言ってくれるな。だが、避けてるだけじゃ俺は倒せないぞ」
確かにその通りではあった。
避ける事が可能でも、避けているだけでは目の前にいる男を倒す事は出来ない。
相手の実力から言って、そうそう隙を見せるとも思えなかった。

しかし、はっきり言ってしまえば、千秋からすれば倒す事よりも時間稼ぎが優先なのだ。

自分たちの目的地である研究所に二人が着いてくれれば、とりあえず敵も簡単には攻め込むのは不可能。

翔の近くには紫苑も一緒にいるので、その点も問題はない。

「ちょこまかと」

男は呟くと、千秋を掴もうと腕を振るう。

千秋はそれに気がつくと、男の腕を蹴り飛ばして力の方向を変えた。

その反動で男が踏鞴（たたら）を踏んだ瞬間に、千秋が蹴った勢いに身を任せて踵を叩きこもうとする。

ところが男は無理に体勢を整えてそれを叩き落とした。

お互い、そう簡単に決定打を与える機会が訪れない事を悟り、一度離れる。

そのまま相手の出方を探る為に二人は沈黙した。

目を相手に向けながらも千秋の思考は、男の更に奥、乱立する木々の向こうへと飛んでいる。

すでに翔と紫苑は自分の居る場所からかなり離れているだろう、と千秋は考えていた。

もう少し経てば、自らも逃げる事が可能ではあった。

そして、逃げる事や隠れる事に関して言えば、千秋の能力は他に追随を許さない程に適しているのだ。

千秋が持つ能力。

それは『同化』と呼ばれるもので、無機物と自身の体を一体化させる能力であった。

要するに『生』を持たない物ならば、体をその中に隠す事が可能なのだ。

逆もまた然り。

物質を体の中に隠す事もできる事から、その能力の利便性は多岐に渡る。

同化している物質を破壊されればそのダメージが自分に返ってくるという欠点を差し引いても、十分に強力な能力であった。
それ故に、逃げる事はいつでもできると考えた千秋は選択肢を変える事にしたのだ。
「少し頑張っちゃいましょうかねー」
千秋はそう零すと、大男を倒す為に一歩前に出た。
後の憂いを無くしておくのも吝か（やぶさか）ではないと思考する。少なくともここで倒しておけば、次に翔がこの男に狙われる事はなくなるのは確かなのだ。
その考えを内に秘め、千秋は一気に飛びかかった。
当然、様子を見ていた男は迎え撃つ体制を取っている。
「見えているぞ！」
「ですよねー」
男は裏拳を放つ要領で、楽しげに声を上げる千秋に向かって腕を振りかざす。
顔面を狙ったその拳を千秋はしゃがみ込む事で避けると、そのまま立ち上がる反動を利用し、無防備に晒された顎に向けて拳を繰り出した。
「甘い！」
だが、男もすでに反応していた。
掬い上げるようにして放たれた拳を迎え撃つ為に腕を十字にして、下からの攻撃に対して防御をする。
しかし、その直後――
「何！？」
男は千秋の姿を見失った。
千秋が顎に向けて放った拳はフェイント。
殴るように見せかけた瞬間、先程までの速度とは比べる事もできない速さで後ろに回りこんでいた。
「ってぃー」
千秋は背を向ける男の後ろで二メートルほど跳躍すると、空中で

横に一回転しながら男の首筋に蹴りを叩き込んだ。
瞬間——男は数メートルほど吹き飛び、近くにあった岩へと頭から衝突する。
手ごたえはあった。
牛くらいなら首に叩き込めば絶命するくらいの力で放ったのだ。
いかにロスターといえども、延髄にあれほどの蹴りを放たれて無事であるはずがない。
「意外と呆気なかったですねー」
千秋は音もなく着地して呟くと、倒れている男へと近づいていく。
パラパラと、衝突した岩から小さな石が男の背中に零れ落ちていた。
すぐ近くまで行き、男の生死を確かめるべく手を伸ばす。
その時——
「！」
千秋は腕を掴まれていた。
あまりにも不用意に近づきすぎたのだ。
焦り、掴む腕を振り払おうとするが、男の想像以上の力に成す術もない。
男は何事もなかったかの様に立ち上がると、そのまま千秋をぶら下げるかのように片手で持ち上げていた。
正直、千秋は男の事を侮っていた。
まさか無傷だとは思ってもいなかったのだ。
ただ、蹴り飛ばした瞬間の違和感。
あの金属を蹴りつけたような硬さに疑いを持つべきであった。
「随分とタフですねー」
状況だけを鑑みれば生殺与奪は男にありそうだが、持ち上げられても余裕の態度だけは崩さなかった。
これが戦うべき者の覚悟と在り方であると千秋は考えているのだ。
「ふっ、俺は自分の筋肉を硬質化できるんだ。そのまま攻撃すれば岩を砕き、防御する時には鉄のように硬い体がダメージを受けさせ

ん」
　そう言いながら、男は腕に力を込めていく。
　万力に潰されているかのような圧倒的な握力に、掴まれた腕が悲鳴をあげていた。
「っ……！　女の子に乱暴すぎじゃないですかー」
　痛さに顔を歪めながらも、弱みを見せようともしない千秋に、
「誰が女の子だ。年増のババァがよく言うもんだな」
　その言葉と共に男は握っていた腕を振り回し、投げつけた。
　そのまま千秋は木にぶつかると、背中の衝撃に息を詰まらせる。
　衝撃で木の枝からは数枚の葉が宙を舞っていた。
「楽にしてやろう」
　とどめを刺そうと近づこうとしていた男。
　だが、後数メートルという所で千秋の纏う雰囲気が変わっている事に気がつき、その足を止めた。
　先程までとは千秋から滲み出る気配が明らかに変わっている。
「誰が……」
　両手をぶら下げて、ゆらりと立ち上がる。
　顔は俯くようにしており、前髪が表情を隠すように揺らめいている。
「年増……？」
　そして、その言葉を機に顔を上げた千秋はまるで気が狂ったかのように笑っていた。
　微笑むや、普通に笑うのとはわけが違う。
　顔は笑っているが、目だけは笑っていなかった。
　裂けそうな程に口を横へと広げると、両手を胸の前で交錯して左右に広げる。
　そんな千秋の両手には数本のナイフが握られていた。

◇　◆　◇

千秋と男が向かい合っているその頃――
「なぁ」
前を走る紫苑に遅れないように走りながら翔は話しかけた。
「何かしら？」
「姫ちゃんはあんな筋肉バカにどうやって勝つつもりなんだ？」
翔のその言葉を合図に紫苑は走るのをやめた。
急に立ち止まった紫苑にぶつかりそうになりながらも、翔は慌ててブレーキをかける。
休みなく走り続けていた為、翔の体に圧し掛かる倦怠感は凄まじいものだった。
紫苑は振り向くと、息切れをしている翔を透き通るような蒼い目で見つめる。
彼女は疲れなど一切ないのか、汗一つ浮かべてはいない。
「あなたは何か勘違いしているようね」
「どういうことだ？」
「そもそも、ロスターというのは普通の人間とは次元が違う身体能力を有しているの。確かにあの力は私や千秋とは比べ物にならないほどの腕力かもしれないけれど、これくらいなら私にも可能よ」
言葉の終わりきらないうちに彼女はすでに行動に出ていた。
紫苑は一歩横にステップしたかと思うと、そのまま足裏を木に叩きつけた。
「すげぇ……」
翔はその流れるような蹴りに、不覚にも見惚れてしまっている。
細く長い脚の線が扇情的な動きを伴って地面に戻る頃には、大きな音と共に、紫苑が蹴りつけた木は蹴った場所を中心にして折れてしまっていた。
「千秋にもこれくらいはできるわ。ただ千秋の場合は力と言うより速さと、経験の高さ、それに武器の使い方がうまいのが強みなの」

スカートの埃を落とすように両手で払うと、紫苑は歩き出す。
置いていかれないように紫苑の後に続き、翔は訊き返していた。
「武器？　例えそうだとしても、持ってなかったら意味ないだろ？」
「持っているわよ」
「え……？」
予想外の回答に翔が漏らす。
翔達が千秋と離れた時に武器を持っていなかったのは事実。
千秋の能力をはっきりとは知らない翔からすれば、そう思うのは当然の事とも言えた。
「あの子は体内に武器を隠す事ができるのよ」
「……それもロスターの能力なのか？」
紫苑は頷くと続ける。
「あの子は身を物体に隠す事ができるように、物を体内に隠す事もできるのよ」
「その力で武器を隠し持っているのか」
「そういう事よ」
少し後方にいた翔が小走りで紫苑の横に並ぶと、
「ロスターの力を得るには対価が必要って前に言ってたよな？」
ずっと考えていた事を口にした。
「ええ」
紫苑は翔の方に視線を向けることなく答える。
その先の質問がどのようなものか想像がついているのか、どことなく冷たい言い方だった。
「対価って言うのは一体なんなんだ？」
翔がそう問いかけると、紫苑は足を止めて翔の方を向いた。
「……だいぶ距離も離れたし、少し休みましょうか」
紫苑はその問いに答えず、横たわった大木に腰を落ち着けると、翔も戸惑いながらその横に座る。

どのような意図を持って紫苑が休みを申し出て来たのか、翔には理解ができなかった。
　距離があるとはいっても、安全とは言い難いこの状況での休憩に疑問を持ってしまっているのだ。
　そんな翔を一切気にすることなく紫苑は語り始めた。
「ロスターは人の持つ力を超えた存在であると確かに言う事が出来るわ。……ところがその力を得るという事は人の尊厳さえ失いかねないものでもあった」
「……」
「それは人として誰もが持っている筈の何かを失わなければならない事なのよ」
　紫苑が冷静に告げた事で翔は彼女が何を言いたいのか分かり始めていた。
　紫苑は先程の翔の質問に答えようとしていたのだ。
　ところが、
「……抽象的すぎてよく分からないな」
　翔は眉を顰めて紫苑に顔を向ける。
　翔から見た紫苑の横顔はいつもと変わらないように見える。
　しかし、どこか寂しげに感じてしまったのは自分の思いこみなのか、それを確認する術を翔は持たない。
　ただ見つめるだけ、という形でしか答えが出せないのがその証拠でもあった。
「……あなたは冬の雨の中、捨てられて震えている子猫を見たらどう思う？」
「え？」
「どう思うの？」
　紫苑は翔の方を向く事はなかった。
　翔は正面の緑へと視線を移すと、
「そりゃあ……可哀想だし、どうにかしたいと思うけど」
「それが普通の人間の反応だと思うわ」

紫苑はそう告げると、立ちあがった。
やっとの事で紫苑は視線を下へと向けると、
「私はそれを見ても何も感じない。悲しい、嬉しい、悔しい、そんな気持ちはとっくに無くなってしまったわ」
翔はその言葉の持つ意味が槍となって脳を貫いた気がしていた。
紫苑の告げた事は、人が持つ当たり前のものを否定する事に他ならない。
楽しいと感じる事も、辛いと感じる事もできないとすれば、それはどのような苦しみになるのか翔には想像すらできなかった。
いや、それを苦しいとさえ感じないのかもしれない。
「感情が……ないのか？」
「……」
紫苑の答えは無言だった。
言葉にしなくてもそれが事実であると、彼女は告げている。
翔はそう感じた。

◇◆◇

身を低く沈めたかと思うと、千秋の姿が掻き消えた。
消えたと言っても実際に消えたわけではなく、あまりの速さに消えたように見えただけだ。
「上か！」
男は叫ぶと、今まで居た場所から飛びのく。
千秋が木の上から突き刺すつもりでいた両手のナイフは空を切った。
そのままの姿勢で着地する。
男を一瞥すると、千秋はまた木の枝に飛んで身を隠した。
「やっかいだな。あの速さは」
男は言い、先程までの余裕の態度から一転して迎撃の態勢を整える。

見えづらいのを察したのか、男は掛けていたサングラスも外していた。
その様子を見ていた千秋は何かを確認するかのように頷くと、木から木へとムササビのように移動した。
千秋の手に持つナイフが移動する度に白い軌跡を残している。
それを男は目で追うが、そのあまりの速さに男の顔からも笑みが消え始めていた。
飛び出す瞬間の木の揺れ、着地後の揺れで、大体の位置は男にも確認する事はできていたが、正確な位置まで特定する事は不可能。
更に、あの速さでは特定できたとしても男から攻撃を仕掛けるのは容易な事ではなかった。
そして、移動を続けていた千秋が遂に攻撃の手に出た。
「むっ」
木から移動する際、手に持っていたナイフを投擲する。
移動するたびに放たれるナイフの軌道は不規則。
横から、上から、はたまた後ろから。
次々に放たれるナイフを男は避け続けていた。

男の並はずれた身体能力の高さには、驚嘆せざるを得ないだろう。
すでに放たれたナイフは数十本にも及び、未だ無傷で避け続ける男の戦闘能力はロスターの括りの中でさえ、卓越している。
その男を相手に攻勢を保つ千秋の力量も言わずもがな、並大抵ではないのだが。
「どうして？」
木から木へと移動し、ナイフを放つ手を休める事なく繰り返しながらも、千秋は問いかけていた。
「避けているの？」
言葉と同時に、三方向からナイフが放たれた。
男は転がるように避け、すぐに立ち上がる。
ところが、

「ちっ！」
男の頬からは一筋の血が流れ落ちていた。
あれほど見事に避けてはいたが、さすがに同時に三方向から放たれたナイフを完全に避けることは出来なかったようだ。
男は鬱陶しげに腕でその血を拭うと、攻撃の手を休めて木の枝から見下ろす千秋を視界に収める。
「やっぱりおかしいと思った。あれだけの防御力を持ちながらも、なぜ避けなければいけないのか」
千秋は気が狂ったような表情から普段の顔に戻り、そのまま続ける。
「あなたは確かに鉄壁とも言える防御力を持っていますが、ある程度の速度になると間に合わなくなるんですねー。たったコンマ数秒のラグかもしれませんが、それだけあれば私なら対処できそうですー」
へへへ、と笑う姿は先程までの千秋と同一人物とは思えないほど。その変わりように、気を削がれたのか男は口元を吊り上げて笑む。
「ふっ、確かにそのとおりだ。だがな、その手加減した状態で俺が倒せるとでも思っているのか？」
「手加減するつもりなんてないですよー。ただ、それさえ分かれば対処の方法もあるって事ですよー」

言うや否や、そのまま木の枝から飛び降りる。
「私の攻撃は確かに軽いかもしれませんがねー。速度に重点さえおけば、この通りー」
いつの間に出したのか、千秋の両手には脇差程度の長さの刃物が握られていた。
「面倒な事だっ！」
「お褒めに与り光栄ですー」
まるで舞を踊るかのように繰り出される二本の乱撃に、攻撃する

暇もなく男は回避を続けるが、段々と追い詰められていく。
千秋が腕を振るう度に、生い茂る草木がその生命を散らす。
まるでそこは暴風雨の中心のように断ち切られた緑が宙を舞っていた。
人が作り出した武器が千秋という媒体を得て、その自らの役目を果たそうと男に容赦なく向けられ続けている。
そして、それは遂に大男へと届こうとしていたのだ。
「っ！」
男が一瞬見せた隙。
千秋がそれを逃す様なミスを犯す筈もない。
腹を狙った一撃は、回避行動を終えたばかりの男に吸い込まれるようにして向けられる。
当たる！　と、千秋もそう思っていただろう。
しかし、
「いくら当たる場所を硬くするのが間に合わないとは言っても、先に手を変化させておいて掴む事くらいはできるってのは分からなかったのか？」
凶刃が男の生命を終焉へと導く。
その筈が、男が刃の部分を手で鷲掴みにする事によって阻まれていた。
当然、出血はない。
硬化している事を示すかのように、男の手は薄く光沢を放つ。
そのまま男が少し力を込めると、千秋が右手に持っていた脇差は砕け散っていた。
「それくらい分かってましたよー」
焦るかと思いきや、最初から分かっていたかの様に千秋は気にした様子を見せない。
柄だけになった脇差を捨てると、新たに出した刀で下から斬り上げた。
「甘く見てくれるなよ」

男はそれを左腕で受けると、右手で殴りかかる。
千秋は迫りくる拳を視界に収めると、体を逸らす事で避け、そのまま両手に持つ刀を手離す。
彼女は二つの刀が地面に落ちるよりも早くに行動に出た。
流れるような動きで男の腕を抱きかかえるように掴むと、浮き上がった反動を使いそのまま蹴りを顔に繰り出す。
「そんな蹴りなど！」
閃光のような速度で繰り出された蹴りを紙一重で避け……たはずが、男の額からは鮮血が垂れていた。
「……」

男は自分の腕に掴まっていた千秋を振り払う。
千秋はそのまま空中で猫のように半回転しながら着地して、距離を取った。
「便利な能力だな」
千秋の踵からは一本のナイフが出ていたのだ。
靴の隠し刃ではない。
正真正銘、それは千秋の肉体から生えていた。
「私がどこからでも出せるっていうのを考えてませんでしたねー」
「忘れていたよ。お前の戦い方は暗器使いみたいなものだったな」
額から血を流しながらも、強敵に出会えた嬉しさからか男の表情は楽しげなものであった。
「使うつもりはなかったんだがな。そうも言ってられないようだ」
「！」
瞬間——空気が凍りつくような錯覚に陥る。
「これは……」
すでに血は止まっているのか、男の額からは新しく血が流れている様子は伺えない。

――あれは毛……なんですかねー。
千秋は男の額に視線を向けると、そう思考する。
傷口を隠すように生えているのは恐らく毛であろう。
こんな短時間で生えるはずもないが、どんな事が起きてもおかしくはない。
それがロスター同士の戦いなのだから。

言い知れぬ、体を蝕む悪寒。
千秋は対峙する男にそんな気持ちを抱き始めていた。
――これが、戦い始める前に予感していた不測の事態なんでしょうか……。
そして、
「続きを始めようか……」
男が閉じていた瞳を開く。
「う……」

男の瞳孔は黒から赤へ変色していた。
来る！そう思っている筈なのに、千秋の体は動かない。
心を支配しているものが、久々に感じた恐怖であると千秋が自覚した、その時――
「やめなさい！」
その声が響くと、男は千秋の顔面の数センチで手を止め、そちらへと顔を向けた。
声がする方に立っていたのは、いつの間に現れたのか分からない白の仮面を被った女だった。
戦っている最中も集中を途切れさせていなかった千秋からしても、驚きを隠す事は出来ない。
なぜなら、声が聞こえるまでは気配がまるで無かったからだ。
寸前までそこには人が居なかった。

それは間違いないと千秋は思っていた。
「聞こえているよね？」
彼女は仮面からしておかしいのに加え、抜群のスタイルを見せ付けるかのようなレオタードで立つその姿は場違いな事この上ない。
「ちっ」
男は振りかざしていた拳を下ろすと、水を差された事で興味を失ったのか、千秋の事も見ずにその女の方へと歩いていく。
「そこまでの許可は出てないはずだけど」
すれ違う瞬間――仮面の女は横目で男を見ながら言った。
「使おうとした事は謝る。ただ、使わなければ倒せる自信がなかったがな」
男は懐にしまっていたサングラスを掛け直すと、鬱蒼と生い茂る葉を掻き分けながら木々の中へと姿を消す。
仮面の女といえば、千秋の方に向き直ると、
「次に会う時が楽しみだね」

その言葉だけ残し、男が進んでいった道を引き返していった。
二人が去って行くのを呆然と見送った後――
「助かったんですかねー……」

へたり込むように座ると、難を逃れた事に溜息を漏らす。
あの得体のしれない力。
そして、謎の白い仮面の女。
「報告しなければいけない事がまた増えてしまいましたねー……」
呟くと、暖かいお茶を飲みながらぽりぽりと煎餅を齧る。
横に置いてあったポットを体の中に戻しながら正座をし、いつも通りの様子で千秋は和んでいた。

四章　悲しき邂逅

◇
◆
◇

二人は無言のまま歩みを進めていた。
翔にとって対価の持つリスクは想像以上のものであり、ロスターという存在がこれほどまでに異質で、それでいて危険である事を再認識する事にもなった。
ただ、一つだけ疑問に残る事がある。
それは紫苑達が翔に言った『ロスターの枠組みの中でも自分は特別な存在である』という言葉。
それが意味するのは翔がロスターであると言う事に他ならない。
ロスターは対価を支払わなければならない。
だとすれば、自分も何かを失っているのではないか？と、考えるのは当然の帰結でもある。
翔はそれを訊く事はしなかったが……。

しばらくして——
「不思議に思わなかった？」
「？」
不意に向けられた主語のない紫苑の問いかけに、翔は首を傾げるしかなかった。
「あの子の見た目よ。どう見ても中学生ぐらいにしか見えないでしょう」
「ああ。姫ちゃんの事か」
翔はやっと納得したかのように頷いた。

「あの子の実年齢は私達の二倍以上なの」
「……え？」
翔は聞き間違いなのかと訝しげな視線を紫苑に向けるが、
「あれも対価によって齎される事象の一つなのよ」
紫苑はさも当然と言った様子で淡々と告げる。
翔達の年齢の二倍以上と言う事は、少なくとも三十歳は超えていると言う事になる。
それを事実だと言われても現実味がないのは仕方のない事なのかもしれない。
「姫ちゃんが三十代のおばさん……？」
「間違ってはいないけど、千秋の前では年の事は触れない方がいいわよ。おばさんだとか口を滑らせた時の変貌ぶりは異常だから」
翔は苦笑いを浮かべて、了解と返事をする。
そして、ふと気付いたかのように気になった事を問いかけていた。
「姫ちゃんは対価のせいであんな見た目なんだよな？」
「そうよ」
「年を取らないって事なのか？」
「それは違うわ。あの子の場合は能力を使う事によって、時間が巻き戻っていくのよ」
「って事は、精神年齢は肉体に比例して戻るって事か」
翔は一人納得したかのように口に手を当てていた。
ところが、
「それは違うわね。時間の巻き戻りは細胞に限っての事。実際に時間が戻っているわけではないから、記憶や考え方は年齢通りよ」
横を歩く紫苑はあっさりと告げたが、その事実に翔は顔を歪めていた。
間延びした喋り方や、子供っぽい行動をするおばさんの図を想像してしまった為に。
「素……って事か」
「ええ」

翔は溜息が出るのを隠さなかった。
紫苑はそれを横目にするが特に反応は示す事は無い。
そしてゆっくりと口を開いた。
「対価は大きく二つに分類する事ができるの」
それが説明であるという事が分かると、翔は顔を向ける。
少しでもロスターに関わる事を知っておかなければ、後々困ったことになるのは目に見えているのだから。
「……私のように力を手にする時に何か膨大な対価を支払う場合と、千秋のように力を使役する度に対価を支払うという二つのパターンよ」
若干、自分の事を語る時に言葉に詰まった様子を見せたが、一息にそこまで説明する。
「難しい事はよく分からないけど、要はロスターになるのがいい事じゃないって感じだよな」
「……そうかもしれないわね」
翔の言葉によって、紫苑の歩みに本人さえも気が付かない程の変化があった事を二人が気づく事は無かった。

それから程なくすると、木々の合間から人工的なコンクリートの壁が見え始めていた。
千秋と別れてからそろそろ三十分程。
歩き続けた甲斐あって、すでに目的地は目前に迫っていた。
「あれは……」
「あれが私たちの研究施設よ」
翔は紫苑が示す先を見ると、知らぬうちに足を止めてしまう。
そんな翔の心には少しばかりの好奇心と、それと同時にこれからの不安が押し寄せていた。

この一歩を踏み出したら、何かが変わってしまうような気がしてならない。
停滞する事を人は悪と言うが、果たして盲目のままで進む事が必ずしも善になるとは言いがたいのではないか？そんな想いが心に生まれていた。
それすらも踏み出してみないとわからないというのが、翔の生きている社会という枠組みなのだが……。
ならば結局は進むしかない。
それがどんな結果を出すとしても、何もしないで後悔するのよりは幾分かはましかもしれないのだから。
紫苑は少し先で、翔の事を黙って待っている。
視線が合うと翔は曖昧な表情で頷き、再びゆっくりと歩みを進めた。
「こんな場所に建ってるのか」
外観はまるで軍事施設のような佇まいをするその建物は、周りの景色と相まって奇妙のコントラストの上に成り立っていた。
切り立った崖の下。
山の窪みを利用して建てられたのか、その場所はまさに天然の要塞と言っていいかもしれない。
「随分と大きいんだな」
「こんな奥地にまで人が来る事はなかなかないから隠す必要もないのよ。もっとも、入る事ができないから見つかってもそれほど問題ではないけれど」
これだけの施設。
セキュリティもしっかりしているのは当然とも言える。
近くまで行くと、翔の目には入り口らしき場所が見えてきた。
人が通るであろう扉の横には、車が通る為なのかもう一つ大きな

扉が付いている。

それから、紫苑は扉の前に立つとトランプほどの大きさのカードを差し込んだ。

『ピー』という音と共に、扉が開く。

紫苑が中に入り、翔がそれに続いた。

外からは確認する事は叶わなかったが、入ってすぐの所は小さな広場みたいになっているようだった。

広場の中心には噴水が設置され、その周りを囲むようにベンチが備え付けられている。

そこでは笑いながら話している男女や、本を読んでいる人まで居た。

殺伐とした雰囲気を予想していた翔は、予想外の光景に拍子抜けしてしまう。

「意外と普通なんだな？」

「この辺りは居住地区だから。こんな場所に建っているから、ほとんどの研究者は住み込むばかりなのよ。必要な物資は定期的にヘリで運ばれて来るから、そんなに不便な事もないわ」

紫苑はそう言うと、携帯電話を取り出しどこかへ電話していた。

こんな山奥で電波が届くのだろうか？と疑問に思い、翔は自分の携帯電話を確認してみるが、やはり圏外だった。

紫苑の携帯電話は本体が特殊な仕様なのか、特別な回線でも使っているのかもしれない。

そう判断を下し、翔は手の中の携帯電話を再びポケットへと押し込んだ。

「来たわ」

紫苑は一番近くの建物から出てくる人を見ると、携帯電話を閉じた。

紫苑の視線の方向。

翔は後ろを振り返ると、二人の人物がこちらに向かって来るのを確認する。
まだ距離がある為、はっきりとは見えないが、背の高い方はどうやら日本人ではないようだ。
アジア系の顔をしているから中国とか韓国とか、大体そこら辺の国の生まれなのかもしれない。
そして、翔がその横を並んで歩くもう一人の方を見ると、
「……え？」
思わず言葉を漏らしていた。
それもその筈だった。
こんな場所にいるはずのない人物がいるのだ。
紫苑達に出会ってから、物事に対する耐性はできていたつもりだった翔だが、それでも慣れたわけではない。
驚くものは驚く。
半信半疑で見ていたが、近くまで来ると確信せざるを得なかった。
「隆太郎……」

「おぉ、久しぶりだな。元気そうで何よりだ」
屈託なく笑顔で挨拶してきた男は、紛れもなく翔と同じクラスの委員長の如月隆太郎だった。
「元気そうじゃないだろ。なんでお前がここにいるんだ？　というか、お前も研究者の一人だったのか？　それに久々って、学校で会ったばっかじゃないかよ」
「おいおい焦らないでくれ。いっぺんに訊かれても答えられないぞ？」
にじり寄る翔を両手で制しながら、隆太郎は苦笑いを浮かべる。
「そ、そうだな……」

答えた翔はバツが悪そうに頬を掻いていた。
疑問に対して感情的になるのは悪い癖なのは本人も理解していたが、また出てしまっていたようである。
「とにかく俺がここにいるのはロスターだからだ。それに研究者というよりは姫ちゃんと同じ諜報担当だな」
あっさりと告げられるが、それは翔の驚きを誘うには十分だった。言葉を失って立ち尽くしてしまうのを責めるのは酷というものだろう。
それほど翔にとっては衝撃的な事実だったのだ。
確かに仲がいい人間でも知らない事の一つや二つあるのは当たり前なのだが、それも常識の範囲での事。
当たり前のように日常にいた知り合いが、一つ違う場所で出会ったらすでに自分の知っている相手ではなくなってしまったようで、遠くに行ってしまったような、そんな感想を抱いていた。
「それと、翔と会うのは一ヶ月ぶりぐらいだな」
そして、隆太郎は更に妙な事を口走る。
「どういう事なんだ？」
疑問に思った翔が訊き返す。
正直、隆太郎の言葉の意味が分からなかったからだ。
説明を求めるように視線を向けると、
「翔はさ、こういう話を知っているか？」
隆太郎の語り出した言葉は、その答えになっていないものだった。
「人間って、例えば只の鉛筆を腕に押し付けただけで、火傷する事もあるんだ。それは脳が熱い物だと判断する事によって体が感じてしまうものなんだよ」
「それがどういう――」
「まぁ聞けって。それでな？　それと同じようにそこにあると脳が認識さえしてしまえば、人間はそれに触れる事もできるんだ。そこに何もないとしても、それはすでにそこにある事となんら変わりは

ない」
　確かに、そんな話を翔も耳にした事はあった。
だが、翔にはそれが自分の質問になんの関係があるのかは分からない。
　それが顔に出ていたのか、隆太郎は仕方がないといった風に笑みを浮かべた。
「要するにだ。俺はこの一ヶ月の間、学校にはいなかったって事なんだよ。確かにいたと思ったかもしれないが、それはそう思わされていただけって事なんだ」
　――そういうことか。
　ロスターには常識が通用しない。
　とっくにその事は理解していたはずだが、改めて人間が行える事象を逸脱している事に舌を巻いていた。
「それが隆太郎のロスターとしての能力なのか？」
「いや、それは俺の力じゃない。学校には翔が知らないロスターが常駐しているんだ」
「まだ居るのか？」
　ロスターの絶対数はそれほど多いものではないと思っていたが、それは早計だったかもしれないと翔も考えを改め始める。
「なんか知らないだけで、どこにでもロスターがいるみたいだな」
「それほどあなたが重要な人物って事よ」
　今まで黙って二人の会話を聞いていた紫苑が話に加わり、そのままの流れでもう一人の男の紹介を始めた。
「こっちの彼の名前はヤン・イー。元々は刀剣術の達人だった上に、ロスターとしての力もかなり上で、この組織でも一・二を争う実力者よ」
　どことなく漂う雰囲気は、獣が牙を隠しているような鋭さがあった。
　細いながらも引き締まった肢体は、それだけで彼の実力を示しているかのようだ。

ヤンと呼ばれた男は、一歩近づくと、
「よろしく」
見た目に似合わず流暢な日本語で話し、すぐにそのままどこかへと行ってしまった。
その様子を見ていた隆太郎は翔の方に向き直り言った。
「一回見ておきたかったそうだ。自分までも出なきゃいけないほどの人物の顔を」
「そう言われても実感は全然ないんだけどな。少なくとも俺には自分がそこまで重要な存在とは思えない」
ただ日々を怠惰に過ごしていた翔にとって、自分が特別な存在であるという言葉には実感が持てなかった。
他人と比べて賢い頭を持っているわけでもなく、並はずれた運動神経を持っているわけでもない。
平凡。
それが翔を表すのには適した言葉だった。
そして、それは本人が一番理解している事でもあるのだ。
隆太郎は困った表情を浮かべる翔の肩に手を置くと、
「それを確かめる為にここに来たんだろ？」
そう言い、笑みを浮かべる。
「それもそうだな」
答えながら、翔も同じように笑っていた。
「そろそろいいかしら？」
二人の会話がキリのいい所だと判断を下したのか、紫苑は無表情のまま口を開いていた。
その言葉に二人はお互い目を合わせ、すぐに隆太郎が申し訳なさそうな表情をして紫苑の方に顔を向ける。
「すまない。時間を取らせてしまったようだ。では行こうか」
「ええ」

答えた紫苑を先頭にして三人はそのまま居住区を抜けると、一際大きい建物へと近づいていく。
この辺りは居住区とは違い、機能性を重視しているのがよく分かる。
必要外の物を限界まで排除しているのだろう。
随分とシンプルなイメージしか感じさせない周囲の光景に、翔は物珍しげな表情を浮かべて左右に目を馳せていた。
「それらしくなってきたな」
最初は研究所と言われても、想像していた場所とかけ離れていた為に拍子抜けしたものだが、人工的な建造物のみが視界に入ると途端にその印象を大きく変える。
隆太郎は翔の様子を横目で確認しながら、
「俺も初めて来た時そう思ったな。今でもこの雰囲気は苦手だ」
過去を思い浮かべているのか、薄く息を吐いた。
「そうか？　随分似合ってると思うけどな」
「俺が冷たそうに見えるって事か？」
隆太郎が冗談まじりの口調で翔に言うと、
「そういう意味じゃない。ただ勉強もできるお前はこういう所に居ても違和感がないって事だ」
「どーだか」
二人は学校にいる時となんら変わりなくお互いに接していた。
翔は自分が秘密にしていなければいけない事を知っている友達に妙な安心感があるようで、素の自分で接する事ができているようだ。
大地にさえ話せない事が、本人も気がつかないうちにストレスとなっていたのかもしれない。
そうこうするうちに、三人は一番大きな建物に辿り着いていた。
翔たちの目的の建物は他の建物と違い、窓が少ないように見える。
ただの錯覚ではないだろう。
研究所と言うより、一種の監獄のような様相をしている。
入り口の前に立ち、紫苑がドアの横にある機械にカードを通すと、

静かに金属製のドアが横へとスライドした。
二人が入っていったので翔も中に入ってみると、ひんやりとした空気が体に纏わりついてくる。
この感じた寒さが外界との気温の差によるものなのか、それ以外の理由によるものなのかはわからないが、正直こんな所に長く居たいとは思える筈もなかった。
「とりあえず報告がてら準備してくるから、少し待っててくれるか？」
「わかった」
翔が返事すると、隆太郎は正面にある大きなエレベーターに乗りこんでいった。
翔は隆太郎が乗り込んだのを確認すると、横を向いた。
すると、
「あれ？　いない」

ほんの少し前まではそこにいたはずの紫苑の姿がそこにはない。
入り口の方を見ても誰もおらず、周囲にも人影すら存在しない。
こんな場所に一人にされた事に妙な孤独感を覚え、翔は当てもなく紫苑を探すために歩き始めていた。
結構歩いている筈なのに、他に誰ともすれ違う事もない。
静かな通路は、それだけで異質な空間を簡単に作り出してしまっていた。
「居住区の方には結構人がいたのにな……」
自分の足音しかしない通路を翔がしばらく歩いていると、拓けた場所に出た。
恐らくここはロビーみたいなものなのだろう。
「あれは……」

ベンチが並ぶロビーの壁際で、少し上を向き何かを見ている人影がある。
それが誰なのかはわかっていたので、翔は近づいて横に並んでいた。
「こんなとこにいたのか」
翔が声を掛けると紫苑は見ていた物から視線を外し、横を向くが、すぐに視線は壁に掛けられている絵へと戻されてしまった。
「この絵が好きなのか？」
翔も同じように絵を見上げる。
「……」

ところが返ってきたのは無言。
その絵は片方の翼を失った天使が落ちていくのを、もう一人の天使が手を伸ばし掴もうとしている様子が描かれている。
書きかけなのか、それともこれで完成なのかわからないが、手を伸ばし掴もうとする天使の表情は描かれていない。
能面のような顔からは何も読み取る事ができなかった。
片翼を失っている方は落ちようとしているにも関わらず表情は穏やかで、相手の天使への配慮さえあるような優しい顔をしている。
この絵が示したい事が何なのかは見る人によって違うはずだ。
紫苑にはどういう風に見えているのかは翔には想像すらつかなかったが……。

「いたいた。探したぞ？　準備ができたから行こうか」
二人が無言で絵を見ていたら、後ろから先程別れた隆太郎の呼ぶ声が聞こえ、二人は同時に振り返った。
困った表情の隆太郎は勝手に動き回るなと言いたげに、苦笑いになっている。
悪いな、と翔は手を合わせると、隆太郎へと近づいていった。
「どんな検査するんだ？」

隆太郎の所まで辿りつくと、翔は開口一番にそう尋ねる。
「血液検査と脳波とかだな。血液から遺伝子情報の読み取りをしたり、睡眠時に特殊な体の変化などがないかどうかを調べたりする。他にも調べなければいけない事はあるんだが、それはまたの機会になるんじゃないか？」
「全部いっぺんにできないのか？　何度も来るのは面倒なんだが」
翔の提案に、んー、と隆太郎は顔を顰めつつ答えた。
「体に負担がかかり過ぎる検査もあるからな。きついけどやってみるか？」
「いや……。やっぱりやめとくわ」
隆太郎の表情から嫌な予感を覚えた翔はそう答え、歩みを進める。
二人の後ろを追随するようにしていた紫苑が一瞬振り返り、ロビーにある絵をもう一度見ていた事を翔が気づく事はなかった。

その後――翔は地下にある病院の施設のような部屋で血液検査やCTスキャン、レントゲンなどを撮られ、変な質問に答えるテストみたいなものまで受けさせられた。
検査と名のつくものがある程度は退屈なものだとは翔も理解してはいたが、予想以上に暇すぎる事に不満の声を漏らしていた。
「だあぁ！　だるい――！」
そう言う翔が今いるのは別室の休憩所みたいな所だ。
そこにはテレビもなく、雑誌もない。
誰も居ないから話し相手すら存在しない。
「紫苑は何やってるんだろうな……」
ボーっと手の中にある紙コップに目を落とし、翔は呟いていた。
一人になると考えてしまう。
協力とは言っていたが、結果次第では自分の扱いがどうなるかな

ど分からない。
問題があると判断されれば、それは翔にとっておもしろくもない結末を用意されるかもしれないのだ。
安易にここに来た事を後悔してしまいそうだったが、今更それについて考えても仕方がないと、翔は再び紙コップを口に運ぶが、
「空、か……」
翔はそれを握りつぶすと立ち上がり、ゴミ箱へと放り込んだ。
そのまま欠伸をしながら椅子へと戻ろうとすると、
「暇そうだな」
急に掛けられた問いに翔は振り返っていた。
いつの間に部屋に入っていたのか分からなかったが、そこには壁際で腕を組んで寄りかかっている男がいたのだ。
「いつの間に居たんだ？」
「さっきから居たぞ。そんな顔してるなんてらしくないな。不安なのか？」

「そういう顔してるか？」
翔の質問に隆太郎は笑みを浮かべる事で答えた。
本人も自覚していた事でも他人に指摘されると反発したくなる事も多々ある。
普段であれば不安じゃない、と答えていたかもしれないが、この時ばかりは翔も素直に認めてしまった。
「正直、これからどうなってしまうのかわからない。不安だよ……確かに」
いつもの対応との違いに隆太郎は驚きを顔に貼り付けるが、すぐにそれを崩すと、
「ははは！　お前でもそんな風に弱音を吐くんだな。俺にはいつも肩肘張って生きてきたように見えてたんだけど」

「……」
　翔はそう言う隆太郎から逃げるように視線を逸らした。
「俺はそんな強い人間じゃない。ただ流されて生きてきたんだ。何かがあった時にも人のせいにして自分の弱さは認めてこなかった」
　その様子を見ると隆太郎は寄りかかっていた壁から背中を剥がし、翔の下へと近づいていく。
「自分の弱さに気づける人間って本当は誰よりも強いんだよ。いきなりこんなことに巻き込まれて普通にしてられたら、そいつはただの馬鹿か精神破綻者だ」
　隆太郎は軽く言い、翔の肩をぽんと叩いた。
「お前は弱くないさ。初めての事に戸惑っているだけだよ。何かがあった時にお前なら逃げずに自分の答えを出せる時が来るはずだ」
「隆太郎……」

　翔は俯いていた顔を上げ、隆太郎の目を見た。
　こいつがここにいてよかった、と思える相手が居る事に少なからず感動を覚えていた。
　単純な奴と思われるかもしれないが、それだけで気分が幾分かましになる。
　実際に自分が強い弱いかなんて関係ない。
　逃げるなよ、と言われている気がした。

　それから隆太郎は思い出したかのように手を叩く。
「今、紫苑の奴が翔の血液のサンプルを元に色々調べているみたいだ。後で結果がでると思うが、それまでに最後の検査をやっておくからな」
　その言葉と共に翔の視界では隆太郎の顔が歪んでいた。
　自分の意思とは無関係に周囲の景色が二重に揺れて見えている。
「最後の検査って……どんな、やつ、なんだ……？」

翔はふらつく自分の体を倒れないよう留めながらそう言うと、自分を襲う急な睡魔に抗っていた。
しかし、それも長くは続かない。
「効いてきたみたいだな。さっき飲んでいたコーヒーに睡眠薬が入っていたんだ。言ったろ？睡眠時の脳波も見なければいけないんだ」
翔の体から力が抜けて倒れこむ。
それを隆太郎は支えながら呟いた。
「安心して眠ってろ。すぐに終わるさ」
朦朧とする意識の中で、翔は最後にその言葉を聞いた気がしていた。

◇
◆
◇

——ここは、どこだ……。
ゆっくりと立ちあがった翔は、自分の体がある事を確認するように手を見つめていた。
こんな所に自分がいる理由が分からない。
「確か、俺は隆太郎と話をしてて——」
翔は記憶を辿る様に呟くと、気がついてから続いている鈍痛に顔を顰めながら額に手を置く。
だが、その痛みはすぐに治まり、翔はゆっくりと顔を上げた。
「どこなんだここは……」
翔が立っているのは幻想的な森の中。
森と称してはいるものの、それは翔が知っている木とは程遠い。
見たこともない程に美しいガラス細工のような木が乱立し、どこから差し込んでいるのか分からない淡い光に照らされた地面は、見る角度の変化によって虹色に光っていた。
「あれは、湖……？」
そして、すぐそこに見えたのは光が織り成す芸術のような光景だ

った。
近づく為に歩くと踏みしめた地面がシャリシャリ、と砂浜を歩く様な感触を返してくる。
細かいガラス片が敷き詰められたかのように広がっているようで、それが光に反射してこのような色を生み出しているらしい。
翔は湖の端でしゃがみ込むと、水の表面に触れた。
「っ……！」
その瞬間——そこから生まれては宙に浮かんでいく光の珠が水面に反射し、小さい月を無数に映し出していた。
そんな現実離れした現象に呆然としながらも、翔は周囲を見回す。
これは夢なのか？と考えている辺り、現実の物ではないと言う事だけはなんとなく理解はしているようだった。
そして、翔の目はある一点で止まった。
他よりも一回り大きな木の下に座り、微笑んで翔を見ている少女が居るのに気がついた為だ。
「あの子は……」

手繰り寄せられるかのように、ふらふらとそちらに歩いていく翔。
近づくにつれて、少女が全裸である事も分かっていた。
すでに体の線が見えているのに、なぜかいやらしい気分にはならない。
それどころか、少女の纏う神々しい雰囲気に何故か感動さえしている気がしていた。
翔が少女と視線を交錯させたまま目の前までくると、
「座りませんか？」
右手を地面へと指し示し、少女は座るように促す。
「あ、あぁ」
翔は戸惑いながらも短く答え、地面へと腰を落ち着けた。
見た事もない少女相手に素直に従っている自分に疑問を抱く。

彼女の顔をもう一度確認する為に少女へと視線を向けると、
「少し……」

少女は青い水晶のような色の瞳を閉じ、数秒瞑ると、ゆっくりと開きながら正面を見てこう言った。
「ある女の子の昔話を聞いてはもらえませんか……？」
見つめてくる視線には、有無を言わさず黙らせる力があった。
それ故に、翔は意識することなく頷いてしまう。
強制ではなく聞かなければいけないような感覚に囚われて……。
そして——少女はゆっくりと語り出した。

「その子は小さい頃から体も小さくて病弱だったんです。そのせいで、学校にもろくに行けず、友達はいませんでした」
翔の隣で語る少女はずっと視線を湖へと向けている。
その憂いを帯びた横顔は、見た目よりもずっと大人びていた。
「でもその子は寂しくはなかったんです。なぜならいつも優しく頭を撫でてくれる人がいたから」
少女が仄かに笑みを浮かべると、周りの風景と相まって絵画の様に見えた。
儚げで……壊れそうで……消えそうで……。
「本当に大好きだったんです。もしかしたらあれは恋だったのかもしれません」
「……」

なぜ少女がこんな話を始めたのかは翔には分からない。
それを自分に伝える事になんの意味があるのかも、語る事で何を求めているのかも理解はできない。
しかし、それでも耳を傾けてしまうのは、何か感じるものがあるからなのか。
それすらも分からなかった。

「ある日、その子はその人と一緒に家の近くの森を散歩していたんです。たまたまいつもより体の調子のよかったその子はちょっと悪戯をしてみたくなって、彼がこっちを見ていない隙に隠れました。すぐ見つかるだろうと思っていたのだけど、しばらくしても見つけてもらえない事に段々と不安になってしまうんです。だから隠れていた繁みから出て大声で何度も叫ぶんです。でも……彼は現れませんでした」

「迷子になっちまったんだな」

翔がそう言うと、少女は頷いて続ける。

「そうですね。そのまま探し回ってるうちに自分がどこにいるのかも分からなくなり始め、少しずつ暗くなっていく空に余計に不安になって走り回って探したんです。そんな事をすればどうなるか想像つきませんか？」

少女は地面に積もる粉を手で掬う。

指の隙間からサラサラと破片が零れ落ちた。

「病弱な子だったんだよな……？」

翔は言葉を濁しながらも、少女の言おうとする事を汲み取る。

少女はそれが分かると、

「その子も自分の体が弱い事は分かっていたはずなんですが、すでにパニックになっていたんでしょうね。気が付いた時には、呼吸もままならないほどに衰弱して倒れてしまったんです」

寂しそうな表情で告げた。

確かに小さい子が一人で暗い森で迷子になってしまったら、と翔も納得していた。

その時の不安といったら尋常ではないだろう。

取り乱してしまうのも無理からぬ事だった。

「そのままその子も自分は死ぬのかな……って諦めかけていました」

翔はその子の事を考えると、何かが引っ掛かる感じがしていた。

こんな話は聞いたことがないのに、何かを知っているようなそんなもやもやとした感覚。

「その時でした。その子の前に知らない男の人が現れたんです」
「知らない男？」
「はい。その人はすごく優しい目をしていました。なぜか大丈夫な気がして安心したんです。それで男の人はその子に聞いたんです。生きたいか？　と」
「それでどう答えたんだ？」
「もちろん死にたくない！　って答えましたよ。そしたらその男の人はその子に力と病気に勝てる体をくれました」
少女のそんな突拍子もない話に翔は顔を歪める。
現実味のある話から、いきなり理解しがたい話に変わってしまった為だった。
そして、それを少女に問う。
「力と病気に負けない体をくれるっていうのは、どういう意味なんだ？」
「そのままの意味ですよ？　少女は人間の存在を超えたんです……」
「……」
「どういう意味か分かりませんか……？」
翔はそんな存在を知っていた。
人間では不可能な力を持つ存在が居る事を。
「……ロスター」
翔が小さく呟くと、
「そうです。その子はそこでロスターとして生まれ変わったんですよ」
少女は立ちあがった。
穏やかな風に流される髪が少女の表情を隠す。
翔はそれを見上げながら、言葉を失っていた。
掛ける言葉が見つからなかった。
少女の言う『その子』とはここに居る少女の事だとなんとなく感じ始めていたから……。

「そして少し経ったら彼がその子を見つけてくれて無事に帰れたんです。見つかって安心したのか、少し涙ぐんでいましたけどね」
嬉しそうに語る少女の姿に、先程の考えが正しい事を確信する。
「その日からです。その子は今までの病弱だった体が嘘のように元気になりました。友達もできて楽しい日々を送っていましたよ。毎日が幸せの連続でした。あの日までは――」

微笑んではいるのだが、どこか悲しそうな少女の姿を見て、なぜか翔は心の奥に痛みが走ったような気がしていた。
翔はその表情を見るのが辛いのか、目を逸らした。
「その子が元気になって初めての旅行でした。彼女の乗っていた車は事故に遭ってしまいます。その時にその子は一番大事な人を失ったんですよ」

「いつも一緒だったっていう？」
翔は俯いたまま訊いていた。
「はい……。その事故の時に、彼は咄嗟にその子に覆いかぶさる事で庇ったんです。その子が気がついた時には彼は頭から血を流して亡くなっていました……。ただその子は自分が生きていた事よりも、彼が死んでしまったショックで呆然としていました。信じられなかったんだと思います。涙さえ出ませんでした」
本当に痛いときに痛いと言えないように、本当に悲しいときは涙も出ないものなのかもしれない。
自分では経験したことがない為に、それについて明言する事ができないのを理解しつつもそう結論付けていた。
少女はゆっくりと足を進め、湖の縁に立つと、
「思い出したんです」
翔に背を向けたまま呟いた。
その背を見つめながら、翔はゆっくりと腰を上げる。
そしてズボンに着いた破片を払いながら、少女の隣に並んだ。

「何をだ？」
そう問いかける翔に、少女は目を合わすことなく答えた。
「元気な体と一緒に与えられた力の事です。誰かに教えられたわけではありませんが、ただ漠然と、どうすれば使えるのか、どのような報いがあるのかがわかりました。それでもその子は願いました。彼を救いたいと……」

「……」

あまりに真剣な表情に、口を挟むことさえ憚られる。
「そして、その子は使いました。その力を……生命を与える力を」
「生命を、与える……？」
思わず口から出ていた言葉に少女は頷いた。
「そうです。死する者に生命を与え生き返らせる力です。そして——その子は対価によってこの世から存在が消えました」
「！」
少女の告げたその言葉の意味に愕然とした。
「ロスターの能力が強力であればあるほど、その代償も大きいものなのです。死する存在を蘇らせるなんて、その子の存在だけで見合っているのかさえ疑わしいです」

少女は自分の顔が泣き顔に歪んでいくのを止める事が出来ない。
必死に下唇を噛みしめて耐えているその姿を見てしまっては、翔がこんな行動をとってしまった事も仕方がない事なのかもしれない。
それが更に少女を苦しめる事になるかもしれないなどと、翔に分かるはずもないのだから……。
「あ、あの……」
少女は自分を包み込んでいるのが翔だと気がつくと、動揺に言葉を震わせていた。
優しく抱きしめられる事を甘んじて受け入れてしまえば、決壊し

たダムのように湧き上がる感情に押し潰されてしまう事が分かっていたから。
少女は押し返す様にして、翔の胸に手を当てる。
ところが、
「苦しかっただろうな……」
翔が優しく言葉を掛けると、少女はビクリと肩を震わせた。
その話が自分の事だとは一言も言ってはいない。
だが、少女にだって分かっていた。
気がつかれても仕方がない態度を取ってしまっている自分が居る事を……。
「な、何を言って……」
もはや少女の声は聞きとる事すら困難なほどに小さく弱々しい。
少女は翔の胸に顔を埋めたまま、もう顔を上げる事などできなくなっていた。
見せる事になるのは、もう泣き顔でしかないのだから。

それからしばらく経つと、少女はゆっくりと翔から離れていった。
若干目は赤いものの、すでに瞳には涙は浮かんでいなかった。
「お恥ずかしい所をお見せしました……」
少女は照れを隠す様に俯き、頬を朱に染めている。
感情の制御が出来る様になったのか、そこには先程の様な弱々しい姿は見られない。
「いや、俺の方こそなんか勢い任せであんな事を……ごめんな」
「そんな！　私があんな風にしてしまったから！」
少女が慌てた様に否定すると、二人は目を合わせて押し黙る。
そしてどちらともなく、
「ははは」
二人は声に出して笑っていた。

周りの光も祝福するかのように明るさを増し、それが別れの時だと翔にも何故か分かっていた。

少女も理解しているようで、少し離れたのが分かる。

「……彼に会えるといいな」

そのまま翔は優しく笑んで言う。

「そう……ですね！」

少女が一瞬浮かべた曖昧な表情には気がつかない。

そして、翔は再び口を開いた。

「じゃあ、またな」

「はい。また……」

その時にはもう少女の笑みに翳りは無い。

小さく手を振る少女に翔が頷くと、その世界はゆっくりと形を失っていった——彼女だけを残して。

「さよなら」

少女の呟きは風に流されて消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4183y/

失いし者たち

2011年11月14日03時29分発行